

コズミック・ニューズレター改題

UFO と宇宙哲学の研究誌

Kosmos

(コスモス)

No.45



Kosmos 第45号目次

なぜ彼らは来るのか(4).....フレッド・ステックリング	1
テレポテーションはまだ発生する.....ゴードン・クレイトン	10
トビックス.....	15
質疑応答.....	16
金星ロケットの或る事件.....	19
〈新訳〉空飛ぶ円盤実見記(2).....ジョージ・アダムスキー	20
日本GAP各地で活動中.....	30

テレスコープ 今年には日本GAPが発足以来満十年になる。早いもので、十年前に九大教養部の教室で塩谷先生や馬場先生と共にUFOの講演を行なったのが昨日のように思われる。編者のUFO研究歴は十五、六年になるが、その間実に豊富な体験を持って感無量である。さまざまな人が去来し、多種類の説を聞かされた。そして人間の対世界観に殆ど相違はないということを知った。これは貴重な経験である。壮大な理論を展開する哲学者も無名の一労働者もつまるどころ同じ程度の人間なのであって、もの考え方付近の懸路が見事に舗装されたが、この仕事に従事された労働者の方々の真剣この上ない作業ぶりを編者は或る感動をもって凝視していた。そして言論

よりも行動の重要さを痛感したのである。さて本誌は満十周年を迎えるにあたって印刷体裁を一新するとともに、題号をKosmos(コスモス)と変更した。これは宇宙という意味のギリシヤ語であって、英語ならばCosmosとなり、頭文字がCとなる。CよりはKの方が強いのでギリシヤ語にした。やたらと横文字を使用するのは好ましくないが、従来親しまれてきたコスミック・ニューズライターはいかにも長たらくて表記するのが不便なために、思いきって転換を図った次第である。今後は編者個人の行動を少しずつ拡大してゆきたいと思う。これまで多年の間苦闘を続けてきたが、それは殆ど文筆活動にすぎなかった。そこで今後はもっと対社会的な行動の枠を広げることが可能になればよいと思う。なんとすれば、UFO問題について関心を起こす可能性を持ちながらも、情報に接しなればかりに何も知らずに過ごす人が多

☆表紙写真はありし日のアダムスキーと彼が描いたイエスの像。彼は相当な画才を持っていた。

い事実を編者は知っているからである。ダイナミズム的な書物に接するか、またはそのような体験でも持たない限り、人生観や世界観などは簡単に变化するものではない。ゆえに情報媒体として拡張を図ることが先決問題であると思うのであるが、さてどうかナ。

しかし最近の米ソの宇宙開発実験によってアダムスキーの説は次第にくつがえされるではないか、と問う人もある。これについては前号の巻頭言にも述べたように、トップ・シークレットの軍事機密を大國がおいそれと洩らすはずはなく、また大衆も米ソの「大本営発表」なるものを信じきっていて、宇宙開発の成果発表に何らの疑念も起こさぬという状態なのである。だが日本GAPにはきわめて鋭敏な感覚の持主が多く、たとえばアポロ宇宙船が月に着陸する光景をテレビで観察している会員たちから、毎回必ず不思議な状態の目撃報告が寄せられるのである。最近もアポロ十四号の月着陸の場面を二月六日夜テレビで見ていた会員増田幸雄氏は、前方で二名の宇宙飛行士が行動している光景を撮影中のテレビカメラの直前に一瞬黒い影が走ったのを見たという。これはきわめて興味深い現象である。かりにこれが増田氏の錯覚であったとしても(そうは思えないが)、一般大衆がこの増田氏やその他の会員の如くに異常な物を発見しようと細心の注意を払って画面を見つめているとは思えない。何らかの刺激を与えれば一瞬視聴者も反応を示しながら月面の光景を見るであろうが、目下はそのような刺激を与える源泉となるものが存在せず、月は死の世界で土砂以外の物は何もないと思込んで、ただぼんやりと見ているだけである。会員渡辺利朗氏からの報告によると、七日付毎日新聞朝刊に宇宙飛行士の報告として、「クレイターの底に〇、六メートルのガラスでできたプールのような物が見えた」という記事が掲載されていたそうである。同氏の推測によれば、これは地中の球状都市が球状室の上方に設置されたエネルギー吸収レンズではないかという。これも考えられることである。また月の地下には大量の水分が含まれていると報じた新聞もあった。こうした種々の記事やテレビ画面の奇妙な現象等を総合して考えてみると或る一つの壁に突きあたると驚くべき重大な秘密を隠蔽していると思われる壁である。これが取り除かれて真実を目撃できるようにするのはいつのことかわからぬが、少なくともわれわれは地球人による宇宙開発にも関心をもち続けたいと思う。興味あるニュースがあれば編者宛寄せられたい。

はどこでわれわれと会えばよいかを確実に知っており、短時間の会話を行なうのにその時刻が適当かどうかも知っているのである。二度ばかり私は彼らとかなりの時間にわたって話し合う特権を与えられた。

ここで私がつけ加えたいのは、宇宙人たちはこちらの心中から想念を読み取ったり、質問されたくないような事柄に対しては心を空白にするような偉大な能力を持っているということである。彼らは、地球人の心は処理できる限界以上に多くの事柄を望みたがごとく知っている。この場合、彼らはその時相手（地球人）にとって最も重要な知識になると思われる情報を伝えるのである。彼らは地球人よりもはるかに鮮明に状況全体を観察できるのである。

私は宇宙人の男（複数）ばかりでなく女（複数）にもコンタクトする光栄を得た。私が受けた情報からわかったのだが、彼らは一九四〇年代の始め頃から相当な人数で地球人のあいだにまじって住んでいるのである（注）それ以前にはいなかったというのではない）。大都市（複数）には百人もの宇宙人が住んでいて、ひそかに働いている。彼らは科学的・社会的に多くの方法で地球人を援助しており、同時に彼らも地球人から学んでいるのである。彼らはあるゆるタイプの人から成っている——黒人、白人、東洋人等のタイプである。背の低いものもあるし、高いものもあるし、その点は地球人と変わらない。

彼らは科学的にも社会的にも地球人をはるかに凌駕しているが、彼らの惑星上にもやはり改良と進歩の余地があるのだ。彼らは自分たちの宇宙船や社会組織等の改良の仕方を地球人から学ぶ必要はないだろうが、地球人の「コントロール」されたい心については学ぶ価値があるのだ。彼らは地球人の感情の激しさに大きな興味があるらしい。というのは、地球人はちょっとの間

大喜びしたかと思うと次の瞬間には悲しみに沈んでしまう。全く一瞬間で変化するからである。しかし彼ら宇宙人は地球人をよく理解している。この場合の彼らの動機は非難ではなくて、地球人の振舞の分析にあるからだ。

さてここで金星から来た一人間と私とのコンタクト（複数）の一つを説明しよう。これは一九六六年三月十九日にワシントン市で発生したものである。二人は約十分間公衆の面前で会った。宇宙人は名前を告げて自己紹介するよいうなことをしないので、私は彼らをただ「ブラザーズ」と呼ぶことにする。これは全く彼らにふさわしい呼称だ。

二人がその場所（注）どこかは不明）に入った時、二人ともすわらなかつた。多くの時間がなさそうだったからだ。私は相手と少々科学的話がしたくてならなかつたので——ただし私は決して科学者ではない——、われわれは米國とソ連が最近打ち上げた宇宙ロケットについて話すことを選んだ。これはソ連の金星一号と金星二号、それに米國のジェミニ八号に関するものである。ブラザーは言った。「通常米國が米國よりも大気圏外に関してより正確な情報を流します」更に言うには、これは米國の科学者の英國とソ連に対する協力のおかげで、ソ連の方が大気圏外探索に多くの貢献をしているという。

ちょうどこの頃、われわれの新聞がソ連の宇宙ロケット金星二号と金星三号に関する大見出しを掲げていた。隣りの惑星の近くに到達したばかりである。フットボールの二倍くらい大きさの一個の小さな物体が、一トンもある乗物「金星二号」からはじき出されて金星の大気圏内に突入し、その惑星の地表へパラシュートで軟着陸を行なったのである。ブラザーは言う。「その小さな装置はしばらくのあいだ無線信号を発していました。その信号は地

球の科学者の金星に関する考えを訂正したのです」だが、どんな信号だったのか、どんな情報を科学者が受信したのかは洩らさなかった。

宇宙ロケット金星三号が遠からぬ距離でその惑星を通過していたからには、それが例の軟着陸した装置から信号を地球へ送るのに「手助け」したと考えても不合理ではない。

この時ブラザーが話した。「金星に関する真相が一般に知られるようになるのも、そう遠いことではないでしょう。金星の周囲には磁気の保護層があって惑星を包んでおり、それが種々の宇宙線を防ぐためのすぐれた保護装置として役立っています。この保護層は電離層の自然の電気的な各層と同様に非常に高温を保っているのであって、この層は金星人によって人工的に作られたものです」相手の話がとぎれたので、私は思った。「この保護層がおそらく金星上で地球の放射能の影響を最少限におさえているのだな」

そうです、と相手が私の考えを確認して言った。「なぜならそれが保護層の目的なのですから」

われわれは話題を変えた。私の眼をまっすぐに見つめながら相手は尋ねた。「あなたは天国が存在すると思えますか？」

ちよつと考えてから私は答えた。「天国はわれわれ自身の内部に存在します。これは少なくともイエスの言った言葉です」

「そのとおり」と彼はうなずいた。「全くそのとおりです。あなたの知っているところによれば、地球人は他の惑星上の状態を「天国」とみなしますけれども（注）これはアダムスキー情報を知っている人を対象としたもの）、私たちは自分の世界をより良い住み場所にするように毎日を働いているのです。私たちはそれなりにうまくやっております、地球で経験されるような多くの退歩を経験しません。たとえば戦争や破壊は大きな退歩です。私たちは自分の世界に物質的な「天国」を築いているかもしれませんが、問題になるのは「真の

天国」です。しかもそれは人間の内部にのみ見出されるのです。私たちの世界では、人々は真の天国を見出ししています。私たちは長いあいだ次のことに気づいています。つまり、単なる人間——すなわちエゴとしての人間は何事もなすことはできない。人体を通じて働いている「父」すなわち「宇宙の英知」がすべての仕事をなすのであると」

私はこの言葉をはっきり思い出した。というのはそれは二千年前にイエスが述べた言葉でもあるからだ。ここで二人の会話は終わった。互いに別れの挨拶を交して、機が熟した時の再会を望んだ。

ここで私はどうした動機のもとにやっている私の活動に対する一つの考えを述べてみたい。たとえば私は「他の惑星上の生命」に関して国内の各種の新聞に多数の投書を出したが、ここにその一つを掲げることにする。これは没にされたものだが、一九六六年三月十日にワシントン・ポスト、イーヴニング・スター、デリー・ニューズ各紙へ出したものである。

金星に関する真相

われわれ大衆は果たして事実をつかんでいるだろうか？ 一九六二年後半に米国の宇宙ロケット、マリナー二号が金星の表面温度を華氏八百度と「説明した」にもかかわらず、ソ連の如き他国はこの発見事を信じていないと思われるのである。さもなければソ連は金星へ二個の新しいロケットを送り出す労を取らなかつただろう。その一つは金星に軟着陸した。しかも米国の科学者はソ連のロケットの成功後に米国の新聞に次のような声明を掲げることによって真相を暴露したのである。それはソ連の金星軟着陸に関してワシントン・ポスト紙に出された次の記事である。

「米国の科学者はこのソ連の軟着陸についてきびしく批判的である。とい

うのは、われわれはそのロケットが殺菌消毒されていたかどうかを疑っている。殺菌されていないロケットなら地球から金星へ細菌を運んだかもしれず、それは金星上の生命発見のチャンスが無にしたかもしれないからである」
 そこで私は科学者に公開質問したい。「一体、八百度の表面温度だというのに科学者は如何なる生命を発見しようというのか？ たえば水の沸点が華氏二百十二度だとすれば、なぜロケットが殺菌されねばならないのか？ 華氏二百十二度だけであらゆる細菌は自然に殺されるではないか？」

その後私は次の記事が科学者の誤りを認めているのに気づいた。雑誌「ヌタック」一九六八年七月号は言う。

「米国の科学者は今やマリナー二号の送信したデータをかなりの誤りのあるものとして無視しつつある！ 金星は敵星ではない。地球の生命と似た生命体が存在するかもしれないのだ！」

宇宙人の説明によると事実は次のとおりである。すなわちマリナーによって送信された八百度の熱は金星の電離層の上層部の温度にすぎないのである。これは表面温度ではないのだ。実際問題として、数年前に地球をまわる人工衛星が、地球周囲の上層部の電気的な各層では温度が華氏千八百度以上に及ぶと送信したのである。ゆえに地球上では生命は存在しないということになる。これによって、われわれはまだ学びつつあるということがわかる。われわれはその惑星自体へ行ってくか、またはその惑星出身の人々と話し合うまでは、絶対にバカな発言はできないのだ。しかるにこのような発言が天体や大気圏外に関するいわゆる「学説」や蓄積された「事実」として役立っているのである。

多くの調査が行なわれながら時日は経過し、やがて一九六六年四月二十日となる。私はここ一カ月以上ブラザーズに会っていないかった。ちょうどその

二十日の午後遅く、私は以前にコンタクトしたあの特別な場所へ行くべきだと感じた。果たして、数分間待った後に相手が入って来たので、互いに挨拶を交した。今度はほんの数分間話し合っただけである。というのは、相手はすぐに行かねばならないと言うのだ。

この頃ソ連のルナ十号が月を廻る軌道に乗ったところで、この成果がふと私の心に浮かんだ。そこで私は、それがどこまで成功したか、この特殊なロケットが打ち上げられた理由は何かと尋ねた。ソ連はそれについて沈黙していたからである。相手は答えた。

「ルナ十号は宣伝用の宇宙ロケットで、科学的な価値は殆どないものです。このロケットから受信された情報のすべては、それ以前の宇宙ロケットによってすでに知られているものばかりです。数年前に月の裏側をテレビジョン写真に撮ったこともその一部分です」

私はまたジェミニ八号に何が発生したかを知りたかった。それは中国沿岸から八百マイル沖合で不時着したロケットである。この件に関しては私自身の考えがあったのだ。ブラザーはその事件を次のように説明した。

「まず第一に、あらゆる事があまりに急速に起こったので、二人の宇宙飛行士も地上管制センターも何が起こったかわかりませんでした」

相手はこれをコントロールを失って走っている、数度転覆した自動車にたとえた。驚きとショックの状態にある運転者は何が起こったかはわからないだろう。ジェミニの乗組員はアジェナ・ロケットと非常に困難なドッキングをやったが、そのために、接触した二つのロケットがコントロールのきかない転倒状態になった。このドッキングのために両ロケットはしばらく接触状態にあったが、それによってジェミニの乗組員は燃料のすべてを使い果たさねばならなかった。二つのロケットがやっと離れた時、両方とも空間で回転した——ジェミニ八号は右回りに、アジェナは左回りにである。

ブラザーはここで話を中断した。そこで私は尋ねた。「二つのロケットが回転していた時、両方が数度衝突したにちがありません。アジエナ・ロケットは地上からの指令に応答しなかったのですから」。これは徹底的なコントロール・システムのせいではありませんか？」

相手は私を見つめてウィンクした。どうやらこの事件に関してはこれ以上の情報を与えたくないようだった。

私は相手の宇宙船、すなわちいわゆる空飛ぶ円盤の或る目撃に関する質問を試みた。これは一九六六年一月に起こったものである。後にわかったのだが、数名の空軍関係者も同じ光景を見たのである。一月の或る夜、妻と子供と私の三人はワシントン市のポトマック河上空に出現した一機の円盤を自撃した。それは約二百フィートの高度で南方に飛んでいた。その円盤は約十秒間空のまんなかに見われて、国防省付近の夜空に上昇して行ったのである。その大きさは月くらいで、中央部は緑色、その周囲にはオレンジとブルーのリングがあった。動くにつれて短かい、火花のような尾を伴っていた。円盤の周囲のフォースフィールドの外層も少し光っていた。——クリスマス・ローンク火に似ているな、と私は思った。するとブラザーは次のように説明した。その花火のような現象はポトマック河流域の空気の高気圧と高湿度、及び円盤が飛んでいた低い高度のせいである。

二人の話は終わって、別れねばならなくなった。相手は、からだに気をつけなさい、と言った。また会えるだろう。

私が別な世界から来た人々と会う時はいつも自分を非常に謙虚に感じるのである。彼らの知識と英知はすばらしいものである。しかも彼らは私たちに相手の優越性を決して感じさせることはない。私は常に彼らが話ってくれたことを書いてきたはずである。

殆ど四カ月が過ぎた。私は下町にいる時に数度の機会にブラザーズに会っ

たけれども、話をしないで、ただ互いに挨拶を交したただけである。ところが一九六六年八月中旬に、われわれは再会して話し合うことができた。たぶん相手は私がヨーロッパへ講演旅行に行く予定であったこと、それで情報を必要とすることなどを知っていたのだろう。今度はわれわれはランチカウンタへ行ってスナックを注文し、約三十分間話し合った。ここで読者に説明しなければならぬのは、この宇宙人は先回に会って話し合った人と同一人物ではないということである。しかし私はこの人も知っていた。というのは数カ月前に他の一人と一緒にいたこの人に会ったことがあるからだ。その時われわれは個人的経験について話し合ったのである。

今度は宇宙的成长と理解力においてわれわれを妨げている地球人の多くの習慣について話し合った。

「かつて私も遠い昔地球に住んでいた時、多くの習慣を持っていました。しかしついに勇を鼓してこの障壁に立ち向かい、自分の生活を変え始めたのです。これは肉体を支配していた悪習であったばかりでなく、利己的な考え、嫉妬、報復等の習慣でもあったのです。その当時すでに私は永遠の生命と、より大きなレッスンを学ぶための、別な世界での生まれ変わりを信じていました。その時私が気づいたのは、唯一の方法は、私の心が反乱を起こしたならば、それを沈黙させること、もっとうまく言えば、自分のエゴと感情を抑制することであるという事実です。これを自動的に行なうことによって、私はイエスの教えた原理に従って行動し始めたのです。これは万人が何はにおいてもそうするように教えられていることです。これは容易なことではありませんでした。次に困難な仕事は、良き考えを実行に移すことでした。最初心はあまりに感傷っていて、みずから降服しようとはしません。ですから、私たちは自分自身または自分のエゴを征服する人間になる必要があるのです」。私は相手の言っていることがよくわかった。相手が昔感じたのと同じ事を

感じたし、今や内奥のキリストを認めるのと同じ段階を通過しつつあるからである。

われわれは地球人の心を読み取る宇宙人の能力について何度も聞かされてきた。そこでその能力は地球上でも同じように働くのかどうかと考えてみた。するとブラザーはうなずいた。

「私たちはみな互いの想念を読み取ることができます。それは肉体と心をリラックスさせる（ゆったりさせる）ことを学んできたからです。ところが自然の能力と才能に殆ど注意を払わない地球人にとって、それは全くむづかしいことです。あなたがたはあまりに心配しすぎるし、一日の九九パーセントは利己的な想念をいだし、テレパシクな印象に対して心を閉じています」われわれは話題を変えた。相手が言うには、彼はすでに地球上の各都市でさまざまな環境のもとに金持ちや貧乏人たちと一緒にこの数年間働いてきたという。彼は次のように述べた。

「あなたがたは同胞に奉仕しないで金のために働き、動機はあくまでも金にほかならないにしても、私は地球人の精神状態についてかなり知ることができました。一日でも誠実な仕事をするならば（注）金を求める気持をおこさないで働くならばの意）、その人は少なくとも自分の持ち分を人類に捧げていることになります。本人の仕事は自発的ではないかもしれませんが、少なくとも本人は社会の前進に何かを寄与していることになりました。私は多くの金持ちの人々に会いましたが、その人たちは前進することよりも誠実な仕事を避けることによけいなエネルギーを浪費しています。もちろん人類を助けようとかから思っていて、そのように働いている人もいますが、このような人は非常に少数のために殆ど目立ちません。私はあなたがたが「きたない」とか「きれいな」とか分類していても、それにこだわらないで如何なる種類の仕事をやるものにも躊躇しませんでした。その仕事は行なわれねばならないの

です。それに汚ない仕事が必要ならば、きれいな仕事も存在し得ませんからね」彼は話し続けた。「地球の各国政府は世界で起こっている出来事を知ろうとして他国へ代理機関を派遣しているでしょう？」

「そうです」と私は答えた。

「それこそ私たちがやっている事なのです。だから私たちは地球人の生き方について多くを知っているわけです。当然、私たちは宇宙船を持っていて、そこから地球上のどんな状態でも全く正確にチェックすることができます。しかし、あらゆる人間について言えるように、実際に価値があるのは個人的な接触や体験です。実際に地球人と一緒に暮らすことによって、時折あなたがたの難問を解決するのを助けることができます。そうしないと援助がしにくくなるのです」

相手は話を中断したので、この時私はジョージ・アダムスキーがかつて私に語ってくれた事を思い出した。アダムスキーによれば、ブラザーズは多くの地球人に話し、地球の科学者、政府、宗教指導者等に多くの知識を与えてきたという。宇宙人たちは彼らの宇宙船に地球の指導者たちを乗せたのだけれども、この人々は殆ど自分の体験について話そうとはしなかった。しかるに近年の多くの科学的業績は、少なくとも地球の科学者に与えられた知識のいくらかが建設的用途に応用されたことを証している。しかしこのことは如何に地球の現下の経済状況がこの貴重な宇宙人からの知識を洩らさせないようになっているかを示しているのである。

私はその日は極端に疲労を感じていた。それでブラザーに説明した。「私は昨夜あまり眠れませんでした。そこで、一夜にわずかに四時間ほど眠っただけで、しかも肉体と心を完全にリラックスさせて、うまくやってゆく方法がわかればと思っただけです。――」

相手は微笑して言った。「人間は幼時から背中を下にして仰向けになって、

両足を少し体^{からだ}よりも高めにして——ほんの少しです——寝るように訓練しないといけないのです」彼は両手を用いて表演しながら説明した。「両腕と両足を少し広げるのですが」と再びその実演をやってみせながら続けた。「ベッドは当然主要物ですから使用者個人の体つきにぴたり合うように作らねばなりません。そうすればあらゆる筋肉はリラックスした状態になります。つまりだれでも——男でも女でも——クツのサイズと同様に自分自身のベッドのサイズがあるのです。こんなふうにするると背中^{せなか}の姿勢が体に対して最もリラックスすることになります。睡眠中は体を動かしたり横にしたりしてはいけません。しかし今言ったような各人の体つきに合わせて^{あわせて}凹^{くぼ}みをつけたギブス式^{ギブス式}ベッドならば横になったりすることはできないはずです」

これで私は或る宇宙科学雑誌で読んだ記事を思い出した。それには次のように書いてあった。

「宇宙開発の科学者たちは宇宙飛行士を睡眠中に体を動かさないように注意深く訓練し、観察している。なぜならせまいカプセル中で体を動かすと宇宙空間で多くの眠れない夜をすごすことになるからである」

ブラザーはつけ加えた。「そのとおりです。彼らは睡眠中に体を動かさないことが大変重要であることを発見しました。というのは、体を動かすことに本人は半分目覚めることになるからです」

私は右に述べられたようなベッドが産業界で作られて市販されるとよいと思う。しかし同時に、このようなベッドの重要性を一般大衆に納得させるのはさぞかし困難だろうとも思う。

この時、われわれ二人の対話が終りに来たと思ったが、まだ心中に疑問があった。すなわち一肉体の生存期間から次の生まれ変りに際して、一体どれだけの記憶を持ち運べるものか知りたかったのである。言いかえれば、われわれは突然に自分の過去の生涯を思い出すことができるのか？ この生まれ

変りについては非常にすぐれた説明がアダムスキーの著書『空飛ぶ円盤同乗記』に述べてあるが、なおも私は宇宙的な記憶に関する事柄を相手から話してもらいたかったのだ。

彼は言った。「それは非常にゆっくりと少しずつ起ります。多年を要するでしょう。やがて本人は過去をよく思い出すのです」こう言って彼は一つの美しい例をあげたが、それは私の質問に対する完べきな回答だと思ふ。「あなたは花の成長ぶりを調べたことがありますか？ 芽として始まって次第に大きくなり、やがて花が咲きます」

「それは何度もやりました」と私は言った。

彼は続けた。「今閉じている花があって日ましにゆっくりと開いてゆき、ついにその顔を光の中に広げます」

彼が話すにつれて私はかつて見たことのある美しいカラー映画を思い出した。それは熱帯地方から北極圏に及ぶ多くの花を扱った映画で、一コマ撮りによって花が大きく光の中に開く様子を見せていた。

彼は言う。「花の動きについてはよく見ましたね。人間の過去の記憶もこれと同様です。それは非常にゆっくりと展開するのです。しばしば人間は特殊な環境下にいなければならぬことがあります。すると突然、本人は自分が見る物との親しい関係を感じるようになりますが、これが記憶です。この現世においてまた互いに会ったことのない人々が、突然自分の内部に次のような感じを受けることがあります。

△どういうわけか、われわれは互いに知り合いのような気がする！▽

たぶん両人は各自の親類よりも親密に感じるかもしれません。これも記憶がよみがえっているのです。なぜなら、その場合二人は前生で互いに知っていたからです。そうでなければ、以前に会ったことのない他人が自分にとって親しい人だと内奥から感じられるわけがありません。

他の惑星では人々は幼時からこうした記憶に気づくように教育され、平和な束縛のない生活によって気苦労のない生涯が保障されていますから、だれでも過去世をうまく思い出せるのです。これがバイブルに述べられている永遠の生命の秘訣です。地球にも自然の法則と活動の謙虚な観察者になることを知っている少数の人がいます。この人たちは自分の自我の心を侵略的に短気にさせないで、時には多年を要しながらもゆっくりと着実に自分の生命のピクチャーパズルにあてはまる記憶の断片を集めています。もちろんこの記憶は宇宙的なものとして認められて、個人がその記憶から利益を得ようと思えば、それを受け入れねばなりません」

この話が終わった時、私は相手が去ろうとしていることがわかった。二人は立ち上がって別れの言葉を交した。彼はヨーロッパでの講演の成功を期待すると言った。そこで私は、円盤が出現した時にそれを撮らせてもらえる場合にそなえて常にカメラを携行するつもりだと述べた。相手は微笑し、二人は各自の道を行った。

ここで私は読者に説明したい。われわれは旧来の儀式などを行なわなくても、すぐれたクリスチャンになれるということである。(注)この部分はいわゆる既成キリスト教の宣伝をしているのではなく、宇宙的見地から次元の異なる話をしているのである)われわれがキリストの一道具になりたがっていると仮定しよう。キリストとは実際には「意識、父、神、創造主」である。そうすると、われわれは自分の心を「キリストの英知」に導かせねばならない。このことはわれわれがイエスにならねばならないという意味ではない。なぜならイエスは人間——すなわち人の子——であり、更につけ加えると、イエスが自分をそのように呼びたがっていたのである。彼は言った。「人間を自分の主人にしてはいけない。天の父が主人だ」と。天とは人間が「空」だと思っていようだが、これは人間の内部にあるのだ。予言者のパウロは言った。「キ

リストは各人の内部に宿る。だから内奥の「キリストの意識」を認識することこそ、われわれが探すべき真の天なのだ」

私自身も以前は多くの利己的な想念をいだき、心は全くふさがれていて、周囲の出来事に対して殆ど受容的ではなかった。或る日このことに気づいて思った。「自分が周囲に対して何も注意を払っていないというのに、一体どうして同胞の援助を奉仕的にやれるだろうか？」私は変化することにきめて、どうすれば他人に対して奉仕できるかについて少しづつ注意を払うことにした。援助の手を必要とする人は沢山いる。混雑した交差点を渡るのを恐れている老婦人がいるかもしれない。千鳥足のために助けを必要とする酔った人がいるかもしれない。路上のわれわれのすぐうしろの事故現場で援助は必要とされている。事故が何であろうと、何はおいでもただちに援助し、質問をするのはあとまわしにしよう。人間のすべてが時には援助を必要とすることを忘れてはならない。事故の原因が何であろうと、なぜ人が酔っぱらってしよう、なぜ事故を起こそうと、それは問題ではない。われわれのフィーリング(感覚)は常に「何はおいでも人を助ける」ことでなければならぬ。

この感覚は万人に向けられるべきである。われわれ白人種が創造主の生命の贈り物を受けているのと同様に、創造主が黒人にも生命の贈り物を与えた時、分裂状態を作らなかつたのである。人間がそれを作っているのだ。われわれが神のようでありたければ、分裂や憎悪を作り続けてはならない。なぜなら創造主は創造物のすべてを理解しているからである。人間がなすべき事が一つだけある。それは「人学んで奉仕する」ことである。ただしこれは、ひどい怠け者で誠実な仕事ができない人に金を与えることではない。しかし餓えてノドが乾いている人を見たならば、サンドイッチとコーラを買い与えることによって、もはや哀れな人を作らなくてもすむことになる。われわれはこうした目的のためにポケットに常に一ドルを持つべきである。私は他人の援助

を必要とした日々をよくおぼえている。与えれば必ず与え返されるのだ。たぶん同じ相手からではないかもしれない。だが与え返されることは問題ではない。われわれは一大人間家族と考えられるからだ。

故ルーズベルト大統領は次のように言った。「助けようという心を持つ人が判断する権利を持つ」

われわれが兄弟に対して援助の手を貸す時に、心中で感じる喜びの感情ほど大いなる報酬はない。なぜなら神は兄弟たちの内部にも宿っているからだ。そこでこのことを分裂懸なしに見るならば、われわれは「神が神を助けた！」と感じるのである。

私は何度も内奥の生命の喜びを感じた——金や物質的なものによつては得られない、神の贈り物としての「生命」を感じることによつてのみ得られる喜びである。これ以外の如何なる幸福もホンモノではない。なぜなら財産金、——そして時には人間をさえも——その他を所有することは、望ましい真の幸福をもたらす得ないからである。無私の奉仕によつてのみこれがなされるのである。この事はもちろん物質的な貧困のなかに生きねばならないという意味ではない。われわれは建設的なやり方で自分の目的に対して神の創造物を利用するように神の英知を受けている。物質生活をより以上結構なものにしようとして、自動車、飛行機、近代的な家、その他便利な設備を作る際に人間の達成した事は偉大である。更にもっと多くの物質が未来に発見されて、近隣の惑星の人々が持っているような宇宙船を建造できるようになるだろう。多くの科学的分野で役立つように、鋼鉄よりも十倍も固い新しいタイプのプラスチックや合金が作れるだろう。人間の発明的想像力に終りはない。物質は——すなわち神の作った原子は——利用されるために存在するからだ。物質はみずからすすんで役立ち、人間の望む如何なる形にも成型されるのである。

貧困の中に生きることが創造主の人間に対する罰ではなくて、人間自身の無知のためであり、それは心またはエゴに属するのである。多くの人はこの事実に関して誤った態度をとっている。たとえば私の祖父が米国へ来て苦難に会ったために、父も母も同じ目に会い、私も同じ苦しい目に会わねばならぬとする。ところがこれは神のアイデアではなくて人間のアイデアである。われわれは自分の発見事や知識を万人や国家にわかち与えねばならない。この世界を、統合された理解と技術の世界にするためである。快適に生きて、あらゆる近代設備を利用することは人間の特権である。少なくとも高度な物質文明国ではそうである。しかしそれを他国にもわかち与えて同じ快適な生活を送るのを援助しなければならない。

数度の機会に私は人々が次のように言うのを聞いたことがある。「おまえの言っていることは共産主義ではないか？」私は次のようにしか答えられない。「この人々が『共産』という言葉を少しでも考えたとすれば、そして実際にその言葉が何を意味するかを考えるならば、右のような質問は不要となるだろう。われわれは次の事実に向直しなければならぬ。——すなわち真の共産主義原理を実行している国はこの世界に存在しない」

ソ連はどうかといえば、これは共産主義国ではなくて彼らが『資本主義国』と呼んでいる西欧諸国に近い。ただソ連では政府によってコントロールされているのである。もっとうまく言えば、それは政府がコントロールする資本主義国である。これは他のいわゆる共産主義国家群にもあてはまる。ソ連とその衛星国群には真の平等主義は存在しないのだ。

「他国の笛に合わせて踊らない」或る国々も共産圏といえるかもしれない。しかしこれは完全に間違っている。「共産」とは「万人が等しく」という意味なのだ。これを実行している国はまだ地球上に存在しない。だから近隣の惑星群の人々がもたらした知識が西欧諸国と同様にソ連圏諸国でもこぼれ

テレポテーションとは原因不明の
瞬間的遠隔移動現象である。
このナゾの正体は何か？

テレポテーションは

まだ発生している

ゴードン・クレイトン

五年前に発表した記事で私はテレポテーションと思われる事件の三種類の事例を要約して述べた。つまり一九五三年にマニラからメキシコ市へ瞬間的に飛ばされたスペイン人兵士の例、一九五九年にアルゼンチンのパイアブランカの実業家が北西一千キロ彼方のサルタへ即座に移動させられた例、それ一九六三年十一月に日本の銀行員たちが乗った車が消失した事件等である。右の記事を出して以来数年間に私はこうしたいわゆるテレポテーションの驚くべき数例を聞いている。しかもアルゼンチンの同志オスカ・A・ガリンドス氏はヘラルド・ビダル博士夫妻の有名な事件の記事を一九六八年に出した。それによると夫妻はアルゼンチン、ブエノスアイレスの南方チャスコムスのハイウエーから車に乗ったまま突如メキシコの或る道路上に移動したというのである。(注||以上の各例はかつて本誌で紹介したが、その号は品切れである)

右の各例におけるきわめて重要な要素と思われるのは、"車を包んだ不思議

議な白い霧または雲、またはモヤ"という言葉である。その後の調査によつて、われわれは更にチャスコムス事件と同じ夜に同じ道路上でトラック運転手が前方に出た不思議な"霧"のかたまりに遭遇して、そのために体に種々の症状が現われて、病院へ直行せねばならなくなったことが判明した。

読者のなかには一九一五年八月に起こった有名なガリポリ事件を思い出す人もあるだろう。その時は英国の兵士の大きな体が低く垂れこめている数列の霧または雲状の物の中に押し込まれて、トルコの敵軍にも味方の者にも二度と見られなかったという。

あとで述べる新しい事件のなかにも、この白い霧またはモヤという言葉がでてくる例が二つある。

過去二三年間に(一九六八年―九年)、南米からもこの種の不思議な報告を数例受け取った。「一般にそのような報告はアイマイで、噂にすぎない」と読者は言うかもしれない。しかしUFO物語全体があらゆる面できわめて怪奇になつてきたので、数年前には全くあり得ないことと思われた事件にも、今は少なくとも慎重な考慮が払われてよいだろう。

暗示や噂などは断じて事実そのものではない。もし事実を含んでいれば、テレポテーション問題についてとやかく言う前にわれわれはもっと詳細を入手したいものだ。

だがわれわれは南米諸共和国の状態は、元の状態とは著しく異なつてきたことを知っている。南米の民間UFO研究者たちは"国家防衛"という強固な壁に益々直面している。そして極端に慎重に事をすすめる必要を感じている。ゆえに南米にいる多数の同志通信者のいずれも、われわれが今入手している資料にもっと多くの光をあてることができること、テレポテーションに関する別な論文を遠からず出すことは、現状ではかなり困難である。

チャスコムス事件以後に入った報告

一 チャスコムス事件の続き

われわれはビダル夫人が一九六九年の始めに白血病で死んだことを聞いた。この情報はその家族の一人からヨーロッパ出身の一研究者に伝えられたものである。

二、テレポートされたハネムーンの二人

別な情報源から次の事がわかった。一九六八年にブラジルの新婚カプルがハネムーンに出かけて、南部ブラジルのリオグランデドスル州を通過して車でドライブする途中、休憩するために停車した。二人がフォルクスワーゲンの中にすわっていた時、突然二人は強い居眠りに襲われた。二人が意識を回復した時、メキシコにいたという。ビダル夫妻と同様である。

三、リオグランデドスルの例

この実例は一九六八年に同じ地域をジープで旅していた二人の若い男に關するものである。その時はポルトアレグレ付近の或る場所で二人は白い霧のカタマリに遭遇した。次にわかったことは二人とも見知らぬ風景の中にいたことで、これもメキシコであったことが判明した。

私は例2と例3. は同一ではないと思う。一九六九年一月十五日にリオデジャネイロの新聞ディアリオ・デ・ノティシアスが次のような興味ある報告をのせた。それによると一つの例をあげて、一つの名前をあげている。

「噂によると、プレジデント・ドウトラ高速道を車で走っていた二人の人が、そこからメキシコの国境に近い米国内の或る町へトランスポートされた。その車体にはトランスポートした謎の物体のフックによってできた跡がついていた。

別なブラジル人のカプル（アザンブジャという）も、似たような事情のもとに車でメキシコへトランスポートされたといわれている。

四、グランセラの例

以下は十一才になる少女グランセラ・デル・ロウルデス・ヒメネスの物語である。一九六八年八月五日付の新聞コルドバ紙に掲載された長い記事によると、この少女は前日すなわち一九六八年八月四日にアルゼンチンの自分の町であるコルドバで恐ろしい体験をしたという。次のとおりだ。

十一才の少女が「白い雲に包まれたまま」自分の町から姿を消した

グランセラ・デル・ロウルデスは十一才である。この少女をよく知っている人、殆ど毎日この少女を見ている人たちは、少女が生来内気で、その平常の話しぶりはほぼ真実を語り、どのような話題でも話をする事ができるところを証言している。彼女はコルドバ郊外の学校の五年生であり、優秀な成績をあげて高く評価されている。中流の環境ながら近隣では最高に評判のよい両親の娘であるこの子は、今や医師の診察を必要とするのである。全身に奇妙な悪寒がし、体が震え、泣き続け、何とも言えない感じがすると言うのだ。彼女は昨日からこんな状態になった。昨日こそまさに一体験を経る運命に

おちいったのである。それは途方もない驚くべき体験で、本人には未知ながらも最近一般人の注意と好奇心をひいた他の実例と酷似しているのだ。このグランシエラの事件はわれわれに殆ど疑惑を起こさせない。そしてそれはむしろサイエンス・フィクションの分野に属すると思われるような奇怪な出来事のぼう大な目録の中でその地位を占めるものである。

「私を助けてつれて帰ってください！」

昨夜午後六時三十分頃に、グランシエラ・デル・ロウルデス・ヒメネスはドミンゴ・フネス通りの第二十番家屋のドアを開いた。ドアを開いた若い女性に対して声を震わせ泣きじゃくりながらグランシエラは言った。「お願い、お願い……夜なので道に迷いました。どうぞ私を助けて家へつれて帰ってください……」

もう続けることはできなかった。声がノドで消えてしまうのだ。家の若い女性はその時家にいた許婚者と一緒に少し話しかけて、その若者が第十警察管区の警察へグランシエラをつれて行くことにきめた。女の子をそこへつれて行ったラウル・ロマンというその若者は、女の子が話した話を聞いたのである。

絶望した両親

一方、午後三時三十分頃から、ロスナランホスのコルドバ側郊外にある第四号路、第三六四号にあるラモン・アントニオ・ヒメネス氏の家では、多数の近所の人たちがグランシエラの悲嘆にくれた母親を慰めながら、不可解な失踪をとげた子供の捜索に協力していた。自宅から決して一人で外出しなかつ

たグランシエラ、自宅から数ブロックしか離れていない学校へ通うにも常に母親が付き添っていたグランシエラ、気が小さくて従順で、決してウソが言えないこのグランシエラを一同は探しまわったのである。

フィアットの工場の従業員であるラモン・アントニオ・ヒメネスが、フトポール試合を見てから帰宅したが、その困惑、驚き、絶望は妻のそれにならなかつた。妻はすでに娘を求めて付近の家をかたっぱしから探しまわったのであつた。すると、午後六時四十五分頃にヒメネス氏は第十一警察管区本部へ行った。その管区内に彼の家があるのである。そして警察の援助を願ったのである。それから二、三分してグランシエラが第十管区の警察にいたことがわかつたので、父親はただちにそこへ行った。

白い雲だけ……

以下は少女が語つた話である。

「お母さんが厚いストッキングをはけと言つたの……あたし、それをはいて正面のドアの所へ行き、道路をあちこち見たけど、だれもいなかったわ。それで家の中へ入ってテレビを見たくなったので、引き返そうとしたらモヤのような白い雲が前の道路上に現われたのよ。それが次第にあたしの方へ近寄つて来て、ほかの家が見えなくなり、動くことも、お母さんを呼ぶこともできなくなつたわ……」

子供はまた泣き出した。数時間ひどく泣いたので眼は赤くなつている。きやしやな小さな全身が震えている。しかもひどく寒い感じがすると言つた。また話し続けた。

「そのあと……何もわからないわ……やがて気づいたら人が多勢いる広場にいたの。小さな男の子も沢山いたわ」

この娘の言っている広場というのはブラサ・エスパニヤ（スペイン広場）であることを警察は後に突きとめて、そこで調査を行なったが、この子が突然そこに現われるのを見た者はいないし、そこにその子がいるのを認めたことを記憶している者もいなかった。質問に答えてグラシエラは言う。彼女はただあてもなくそこを歩き出したが、ついに夜がきて暗くなったので恐ろしくなつて泣き出した。ドミンゴ・フネス通りの家のドアをノックしたのはその時である。

奇妙な寒気を感じる

娘は父親の要求により、昨日ただちに警察医により診察された。その報告によれば、体に暴行の形跡はないというが、ヒメネス氏に対して別な医師や精神病医たちに再検査してもらうようにすすめた。

今朝グラシエラは父親と一緒にフィアット工場の診療所へ行った。というのはブラサ・エスパニヤに来たことに気づいた昨日の午後以来、彼女はひどい寒気を感じて、そのために体が震えるからである。今朝彼女を診察したフィアット工場の医師たちの意見をわれわれはまだ聞いていない。とにかく少女の体験は珍奇かつ不可思議な事で、信じがたい話であるが、とにかく好奇心ある人や博識の士、怪奇物の研究者たちの注意を引いた最近の多くの不思議な出来事の中に入れる価値はある。

五、マルシロ・フェルラスとその妻の事件

ブラジルの大きな砂糖商会アスカル・ウニアウン（シュガー・ユニオン）のマルシロ・フェルラス氏とその妻は、一九六八年または六九年の或る日

ブラジルはサンパウロ市から南方へドライブしていたという。ブラジルとウルグアイの国境地帯付近へ来た時、二人は路上で例の「白雲」に遭遇したのである。ところがその内、「」またはメキシコで気がついたかのであった。夫妻はひどい外傷を受けて夫は重態となり始めたので、数週間後に医師の診察を受けたところ、脳に腫瘍が発見された。その後まもなくカーニバルのシーズン中にフェルラスは自分を撃った。ブラジル空軍の機密保持関係の大佐はフェルラスが前記のテレポーション事件類（二、三、五）について知っていたこと、それらが事実であったこと、しかしそれらはトップ・シークレットとして分類されており、国家の機密保持の分野に入るので、洩らしたり新聞に流したりしてはいけないことなどを認めたといわれる。

六、薬局へ行く途中に馬上からさらわれる

リオデジャネーロの新聞ディアアロ・デ・ノティシアス（一九六九年五月二十四日付）に掲載された記事及び、内陸の新聞フォリャ・デ・ゴイアス（一九六九年六月十二日付）の記事、それにワイナー・ジョセ・モンテロー氏からビューラー博士（注）ブラジルGAPリーダー）に宛てた一九六九年四月二十八日付の手紙等によれば、一九六九年四月二十日の夜に、ゴイアス州で発生したあらゆる事件のなかで最も怪奇な事件が発生したという。

話によると、ゴイアニヤから五十七キロばかりの所にあるファゼンダ・セルラディニョのドロール・ロケなる御仁が、薬局で薬を買うために、その夜馬に乗って町へやって来た。イタウス付近の或る場所へ来た時、彼はいくらかの光（複数）を見たが、そのあとは何もわからなくなり、夜明けに目が覚めたけれども馬には乗っておらず、イトクンビアラとして知られる地点のパラナイバ河の岸の岩の上にはいた。イトクンビアラはイタウスから四百キロも

離れているのである。すっかり混乱して方角のわからない彼は、最初に会った人に呼びかけた。「後生だから・・・ここはどこかね？」

荷馬車で通りかかった人が近くのバス停までつれて行って、そこから彼はバスでイタウスへ帰ることができた。

帰宅すると家族は仰天した。すでに帰っていたのは馬だけであつたからだ。イタウスの他の人々もあの夜、空中に不思議な光（複数）を見たことや、このことは土地で大変な評判になっていることがわかつた。

七空飛ぶステーションワゴン

リオデジャネーロの新聞ウ・シヨルナル紙一九六九年七月二十四日付に出た記事によれば、リオグランデドスル州の四名のビジネスマンが、その月の上旬の或る夜、不思議な、身の毛のよだつような経験をしたという。

その四名、ジョセ・ゴンザレス、オニリオ・ジョセ・ダ・シルバ、ジョセ・シディマル・バルボサ、モイセス・コートは、ノバフリブルゴの町（サンタカタリナ州）を「コンピ」ステーションワゴンで出発した。一行がパウロロペスの町（同州）付近の或る曲り道を廻った時、低空で飛ぶ一機の円盤にでくわした。円盤が車の方へ一条の光線を放つたので、そのためすぐに全電気系統、エンジン、ライト類が停止してしまった。すると車は同乗者たちを乗せたままものすごく強力な磁石らしきもので空中へ引っ張り上げられて非常に高空へ上昇し、驚くべき恐るべき空中旅行をやつたのである！ そのあと再び降ろされたが、そこは同じ道路のはるか前方の一点点であつた。円盤から下へ降ろされたあとはその円盤をもっとよく見ることができた。それは二つの洗面器をフチの所で重ね合わせたように見えて、なおも変化する強烈な色光を放つていた。一同はその円盤が別な車をとめるのを見たが、それは

ビッグアス町発行のナンバープレートをつけた、荷物を積んだトラックであつた。

四人のビジネスマンは奇怪な冒険に打ち震えて、フロリアノポリスのホテル・マジエステックに投宿したが、そこで彼らは医者を呼んで身体検査をしてもらい、官憲宛のリポートを書いたのである。



KEY

- 1 Bahía Blanca
- 2 Salta
- 3 Chascomús
- 4 Mexico
- 5 Rio Grande do Sul
- 6 Pôrto Alegre
- 7 Córdoba
- 8 Uruguay
- 9 Goiânia
- 10 Itauçu
- 11 Itumbiara
- 12 Santa Catarina
- 13 Rosario

アミノ酸を発見

昨年十二月一日付で米航空宇宙局エームズ研究所のシリル・ポナンベルマ博士が発表したところによると、地球以外にも生命存在の可能性があるという。そのキメ手となったのは昨年九月にオーストラリアへ落下したイン石中に発見されたアミノ酸である。これについて生体が必ず持つ不可欠アミノ酸二十種の内五種を発見し、更に十一種の他のアミノ酸に関してもかなりの量を発見した。ポナンベルマ博士の見解は次のとおりである。

1 この発見は地球以外でも生命の起源に結びつく化学進化が行なわれていることについての最初の重要な証明である。

2 これは地球や宇宙内の他の場所における生命の起源について、新時代を開くかもしれない。

3 このイン石からアミノ酸やその他の有機分子が発見されたことはこれらの有機物質が地球生成の時代から存在したことを示唆している。

4 イン石の中からアミノ酸や炭化水素が発見されたのは今回が最初ではないが、これまでの発見ではイン石に有機物がついたのは地球に落ちた跡かもしれないという疑問があった。しかし今度のイン石の有機物の場合は、地球汚染と関係がないことが証明されている。

以上のとおりで、レッキとした科学者が地球以外の宇宙空間における生命の存在説を堂々と公表するようになったことは、十数年前からみると隔世の感がある。もっともこのような説を打ち出したのはポナンベルマ博士だけではなく、米科学界にはザラにいるのだが、日本がひどく遅れているために一般人には珍奇な感じがするのである。

さてそのポナンベルマ博士、米航空宇宙局化学進化部長は最近来日して野田春彦大教授との対談で、すばらしいことを発言したのである。日本の官学教授などの思

いもよらない発言なのだ。といっても米国の科学者はすごく進歩的であるため、UFOについての発言は決して珍しくはない。もっとも先に言い出した野田教授もUFOに関心ある人ではないかな。以下は有楽町のレストランでの対談の一部である。

宇宙人は存在する？

野 アミノ酸が見つかったのは化学進化の証拠になるわけですね。
ポ その通りだ。地球上の生物はごくまれな存在と考えるより、条件さえそろえば必然的に誕生するものだ、と考えるのがわれわれの立場だ。この一年半、星間をただよう希薄な物質の中にいろんな分子が含まれていることが発見されている。アンモニア、水、ホルムアルデヒド、一酸化炭素、青酸、シアノアセチレン・・・原子から低分子へ、それから高分子へそれがより集まって更に複雑な分子へと進化が進むにちがいない。だから或る程度条件がそろえばその段階にふさわしい進化が起こっているはずだ。

野 その終点が生命誕生というわけだが、現在の有力な説では、宇宙に生物がいる可能性のある天体はどのくらいということになっているのか？

ポ 信じられているところでは、恒星の数の五パーセントが生命に適当な感星を持っているだろうということになっている。

野 それだけ生命を持つ星があると、空飛ぶ円盤に宇宙人が乗って地球を見物に来ているなどということも、あり得ないことじゃないように思えてくるねえ。

ポ その通りだ。UFOにせめては、ごくごく少数以外は見まちがいや錯覚とわかったのだが、そのごくごく少数はパイロット、気象学者、天文学者など見間違えははずのない人たちが見ている。これが正しかったかどうかは別として、学者の私でも円盤で飛んでくる宇宙人はあり得ると思うようになって

トピックス

地球外にも生命は存在す

米航空宇宙局のポナンベルマ博士の新発見！

てきた。われわれよりも千年早く文明が発達したところがあれば、現在には不可能とみられることでもいろいろできるはずと思う。

野 話を太陽系にもどそう。米航空宇宙局では月に続いて他の天体の生物や有機物の存在を調査しようとしているようだ・・・

ポ まず火星をよく調べるため、1975年に探測器を飛ばす。バイキング計画と呼んで、詳細な計画もできている。われわれの担当は生物や有機物の検出装置だ。放射性炭素のエサを用意しておき、それを食べて炭酸ガスを出す生物がいるかどうかとか、栄養たっぷり液体を用意して行き、その液体の透明度が落ちるかどうかで生物の繁殖があるかどうかを見る。むろん同時にアミノ酸など有機物も調べる。

野 生物が見つかるだろうか。

ポ 微生物は見つかるだろうと思っている。微生物はわれわれが軽く予想するよりずっと生命力があるもので、たとえば私はアイスランドで098度の温泉でヤケドしたが、その中でもバイ菌がいたし、濃硫酸の中でも真空管中でも微生物が巣くっている。

以上のポ博士の考え方はあくまでも物理学から出発した宇宙生物学という新しい学問分野に属するもので、いわゆるニューフロンティアとは何の関係もない。オーソドックスな物理学で他惑星の生命存在を証明するにはこの調子だと多年を要するだろう。

質 疑 応 答

回 答 久 保 田 八 郎

問 三島事件がマスコミのトップをとらえている現在、民族とは何かを考えさせられております。民族とはさまざまな花にたとえられまじょうし、習慣ともいえるでしょう。日本人とはどんな意味を持っている人種（民族）なのでしょう？ 金星人とはどういった心情の人たちなのか？ さらに生まれ変わりとの民族の関連は？・・・と考えはつきませんが、久保田代表の「人種（民族）観」をお伝え願えませんでしょうか。（東京 佐次本 守）

答 以下は私個人の意見です。私は多年ジョージ・アダムスキー（以後GAと略称する）のもたらしたスカイ・ビーブル（宇宙人）情報に接してきて、それを事実と断定した上で一つの宇宙観を確立させていますから、当然それに基づいて意見を述べることに なります。

GAによれば、この地球上の人類は生物学者が言うように動物のサルから進化したものではなく、別な惑星から移住して来た人々の寄り合い世帯だということです。最初の移住は人類の記憶に伝わらないほどの遠い大昔のことですが、何かそれをおわせるような「天空飛来神話」は各民族間に残っており、日本にも天孫降臨の神話が伝承されたことは周知の事実です。この壮大な神話の内容については不可解な謎がありますが、一方きわめて観念的な面も多々あって何とも言いにくい奇妙な文献です。さてGAによりますと日本人は土星人の子孫だということ、何か特殊な使命を帯びた民族だということですが、これをただちに天孫降臨の神話と結びつけるのは早計です。どだい現代人は古代の風物をすべて神聖視したがる風潮があり、古代人が現代人よりもあらゆる面ですぐれていたかの如く思いがちですが、これは錯覚であると思います。少なくとも歴史に出現している限りの日本人は闘争と殺りくの民族であって、宇宙的な思想のもとに楽園を築き上げようとした民族でないことは史学が示しているとおります。日本人には一種独特な性質があるのですが、その源泉は不明です。

古代人が現代人よりも精神的に進歩していたと言えなくもないでしょうが（ただし日本民族が土星人の後えいであることを意識していた期間）、数千年前の人類よりは現代人の方が物心両面にわたって長足の進歩をとげていることは自明の理であって、「温故知新」というのは多分に曲解されています。とまれ日本人の「土星人子孫説」はもはや残存する文献からは真の解答は得られないでしょう。

さて、地球以外の別な惑星群にも偉大な進化をとげた人類が住んでいて、想像を絶した文明が確立されているという情報を基礎に考えますと、この小さな地球上の民族主義とか国粹主義などは井蛙の管見にすぎず、もろもろの民族主義的抗争はコップの中のアラシにすぎません。壮大きわまりない宇宙的現実の中にあつて地球は全く田舎芝居のステージであり、民族主義などは幼い役者の切るタンカのようなものです。

私個人は日本人を特別優秀な民族だとは思いませんし、ひどい劣等民族だとも思いません。まあ普通の民族だと思ふのです。土星人の子孫だとすれば、かすかながらもその痕跡があるような気がしますが、それが事実であるとしても現段階では特筆に価する事柄ではありません。その痕跡というのは、日本人が「おそろしく權威に弱い民族」であるということ、これは裏を返せば、大昔に日本人が或る宇宙的な「絶対者」に従つて生きた民族であることを示唆しているように思われます。といつてもこれは皇國史観とは関係ありません（皇國史観は近世になって確立されたものにすぎません）。もっと別な意味における民族の体質または本性ともいふべきものを意味します。

宇宙的次元からみれば万人が神の子であり平等であるはずのものを、特定の民族のみが天空から飛来した神の末えいだと称するのは各民族間によくあることで、日本民族に限ったことではありません。これらの天空飛来神話からみても、どうもこの地球が他の惑星の植民地であつたというフシが濃厚です。

金星人の心情についてはGAの各種文献を熟読されればおわかりになる

と思います。彼らの精神の状態は地球人の想像を絶するものの如く、「宇宙人が実在するものならばなぜ公然と現われないのか？」という疑問は、彼らを理解しようとするほど遠ざかってゆくはずで、つまり公然と出現しないのが当然なのであって、現状では全くやむを得ないことです。

問 私の親類には生長の家と称する宗教団体に加わり、相当活発に活動を続けている人たちがいます。私も一度体験的に誘われて一定期間の集會に参加してみました。そこで彼らの活動と私の持っているもの（UFOの知識等）を比較して発表しましたが、それには多少の参加者から質問されたり驚きの目で見られたりしました。この人たちに「宇宙哲学」の中に書かれていることを知らせてあげてよいものでしょうか。逆に相手がかたくなになると思いますが——。第一、大日本帝国憲法の復帰運動なんておかしなことをするもんだと思います。

（滋賀県 関谷正明）

答 生長の家については私にも若干の知識があります。私が小学五年の時に谷口雅春氏の「生命の真相」を読んでから俄然宗教的感性が目覚めて、以来ずつと熱烈な信者でしたが、特に軍隊入隊前後は狂信的でした。しかしその後G Aの哲学や情報に接するようになってからは次第に生長の家から遠ざかり始めて、やがて縁が切れてしまいました。

谷口哲学の偉大さは「信念によって望み通りの物事が実現する」という思想にあります。そして私が生長の家に価値を認めるのはまさにこの思想だけです。なぜならこの「信念の偉大さ」は宇宙的普遍的真理だと思われるからで、少年時代から私は生長の家のこの思想にどれほど勇気づけられたかしれません。ところがです。生長の家では「神思想」と称する、および肉体をリラクセスしたい行法を奨励したり、「甘露の法雨」と題する経典を仏壇の前で読めば祖先霊が救われるが故に自分も救われると称してその説経をすすめたりしています（祖先霊はとっくの昔にどこかで生まれ変わっているだろうに！）。

大体に霊界の存在は私にも以前から疑問でした。この三次元空間において物質の肉体を持たないで不可視のスピリットだけでもって空間に高度な

人間界が形成されているという説は私にとって全く容認しがたいものでした。後にG Aが霊界の存在を否定したために（靈魂を否定したのではありません）納得した次第です。それでは一体なぜ経文を仏前で読めば難病が治るか？ これについて考えられるのは強烈な自己暗示作用です。「この経典の説誦によって祖先霊が救われ、自分の難病も治るのだ！」という確固たる信念が肉体に影響を及ぼすのであろうと考えれば、きわめて合理的です。なぜなら現代医学においても精神身体医学が次第に発達して、精神の肉体に与える影響が科学的に研究されているからです。強烈な反覆思念によって難病の治癒その他の望ましい物事が実現するという理論は各種の精神科学団体がとなえていて、しかも多くの実証がありますから、今後は次第に脚光をあびるようになるでしょう。とにかく特定の宗教団体の経文に頼らなくても要するに強烈な信念を持ちさえすればよいわけですが、これが意外に困難なところから、何かの宗教団体に属して一定の行法を実習しながら信念の増大化を図るのは必ずしも悪いことではありません。人間の思想や進歩の度合は千差万別ですから、他人が熱心にやっている事にはむやみに干渉しないで静観しているのがよいでしょう。

問 現在マスコミのデータでは他の惑星に地球のような文明は未発見とされています。ということは本誌で発表されている事実の他が考えられないでしょうか？ つまり一般人の感知し得ない次元からブラザーズは飛来するのではないのでしょうか？

（静岡県 高梨和明）

答 すでに何度もG Aが指摘しましたように、地球へ来る他の惑星の人間は、われわれと同様の骨や血肉から成る物質の肉体を持った現実の生きた人間なのであって、物質界とは次元の異なる不可視の霊界や幽界等から来るものではありません。ところが、宇宙人とは霊体人間であって地球に接近してから物質化したり非物質化したりするのだというような説が一時となえられたり、現在もそれを信じている人が多数いるようですが、これは完全な誤りであるとされています。日本の或る新興宗教の教祖が信者たちの前で、「みなさん方には見えませんが、宇宙人はここに来ておられ

るのですよ。私にはそれが見えます」と言っている座談録を読んだことがあります。これは幻覚かまたは故意のウソにすぎません。また、私が十二年前に都内の中野公会堂で UFO の講演を行なったあと、円盤というのは心霊学という物品引寄せ現象なのだ、「忠告」してくれた人がありましたが、心霊とも関係のないことです。

問 G A が金星人より与えられた図形を含むメッセージとオメ教授がベドラ・ピンターダで発見したメッセージの関係、その意味等について発表できる段階ではないでしょうか。私たちは非常に関心が深いのですが、さうだとすれば図形と共に知りたいのですが――。

(同)

答 オメ教授の発見は G A 問題と深い関連がありそうで、一見重要そうに見えますが、G A P 側はなぜかこの問題を取り上げていません。しかし一つの事実として研究の余地はあります。この不思議な事件に関する詳細な報告はずっと以前のフライイング・ソーサー・レヴェニュー誌に出ていました。ところが残念なことにその記事の掲載号が紛失してしまい、この件についてはいまだに本誌に詳細を紹介できないままになっています。だれか資料を持っていて人がいれば拝借したいのですが、どうですか。なければ英米あたりへ注文して取り寄せましょう。

問 松下幸之助氏の P H P 誌(一九七〇・二)によると、八ページに林美知子さんが聞かれた地球流刑地論がありますが、どう思われますか？ 後辺からはこの情報があるいはコンタクトマンではないかという気もするのですが――。

(同)

答 それには全然目を通しませんので、何とも申せません。
問 私は青色でない空を想像できません。金星は雲で覆われていると述べられていますが、さうだとすれば憂うつにならないでしょうか？

(埼玉県 小宮豊隆)

答 G A が「空飛ぶ円盤同乗記」以後に出した情報によりますと、金星の空は常に鉛色の厚い雲で覆われているけれども、ときたま薄日がさす程度の薄い雲になることもあるということです。また、かりに常に白雲で覆われているにしても幼時から見慣れていけば別段憂うつになることもありません。

問 この太陽系内の各惑星の一日と一年の長さに非常に興味があります。如何ですか？

(同)

答 全然不明です。

問 本誌第四十四号の記事「二つのコンタクト事件」の A その 1 V の中で「金星人は地球人よりも一歩進んでおり、火星人は一歩遅れている」とあります。ところが「空飛ぶ円盤同乗記」によりますと、地球は彼らの宇宙船が接近しない唯一の惑星だといわれています。これらの関係については如何ですか？

(同)

答 第四十四号に掲載した記事「二つのコンタクト事件」は必ずしも真偽よく性ある絶対確実な資料といえるわけのものではありません。参考程度にお読み下さい。しかし火星人が必ずしも金星人と同レベルに進化しているとは限らないようで、戦争こそ克服してはいるけれども精神的にはまだ進歩の余地があるといわれています。それがどの程度のものか、地球人に比較してどれくらいかの差があるのかに関しては不明です。

金星ロケットの 或る事件

地球の外側に知的生物が存在するというのはサイエンス・フィクションの話だけだろうか。たぶんそうかもしれない。だがメキシコの新聞「オバシオネス」一九七〇年六月二十六日付によると、一九六九年二月四日から七日までの間に不思議な事件が発生した。ソ連のロケットが「イン石」と衝突しそうになったというのである。これはソ連、米、英国の宇宙開発科学者たちの非常な関心事となり、彼らは別な惑星から来た人間が宇宙空間を探索し、メキシコの或る地域を調査しようとしているのではないかと考えている。

一九六九年二月に「ソビエティック・コスミック・アパレイトス」(ソ連では彼らのロケットをこのように呼んでいる)が、写真撮影のために金星へ飛んでいた。その時ロケットが危険状態になったことが発見された。

英国の科学者で「宇宙スバイ」というあだ名のバーナード・ロベルがイングラランドのジョドレルバンク電波天文台からこのロケットの航跡を観測していた。すると一個のイン石がロケットと同一軌道上を接近して来るのに気づいたのである。ただちに彼はソ連の科学者団に通報した。そこで科学者団は至急に計算して、この二個は衝突するかまたは摩擦によって互いに破壊されるという結論に達した。急速司令センターはロケットの軌道を変更した。ところが驚いたことにイン石も同様に軌道を変えたのである！続いてロケットは元の軌道に戻った。するとイン石もまた同様に行動したのだ！しかし驚くべきことに、イン石が地球の大気圏内に突入した時も分解しなかった。それどころか飛来を続けてついにメキシコ、ドゥランゴのセバヨスに落下したのである。当然この事件は新聞の特ダネにはならなかったが、それ以来その地域はソ、米、英の科学者の関心の的になり、ひそかに調査に来る有名学者が多かったが、その中にはロケットの父といわれるフォン・ブラウンもいた。

しかし米航空宇宙局が地図上に大きなシルンをつけたこのセバヨス事件はこれで終了したわけではない。それどころか、その地域の動物たちがなぜか突然変異を起こしたのだ。メキシコ石油会社の技師ヘリー・デ・ラ・ペナの説明によると、彼はイン石の落下した地点の付近で微細なホコリを

発見したので顕微鏡で調べたところ、穴のあるガラス層から成っていることがわかった。これは見たところ爆発前にガスで満たされていたようであった。奇妙なことに米国の最初の月着陸の際に宇宙飛行士がこれと同じホコリを月面で発見している。

(9ページより)

ているのである。——それは経済的理由のためである。もし東方圏に眞の平等が行われているならば、宇宙人がもたらしつつある知識の拒絶は必要なくなるはずである。(第七章終り。以下次号)

DIAMOND CHIPS and ROUGH EDGES

九千年の間 社会が文明への道を歩むことができたのは もっぱら個人の知的精神的創造活動のおかげである。ところで 天啓はだれが受けるのだろうか？ 大衆か？ ちがう。個人か？ そうだ。常にそうである。個人 ただ個人のみが 芸術家 発明家 探険家 学者 研究者 精神的指導者 政治家として 生命の根源に最も近く立ち 生命の真髄を人に伝えるのである。

電燈をつけてニワトリにむりに卵を生ませることはできない。集団的な知性など存在しない。ただ個人の知性があり それが他の個人の知性に話しかけるだけである。また大衆道徳などというものも存在しない。個人道徳の複合があるだけである。

A・ホイットニー・グリスワルド
(元エール大学学長)

G・アダムスキー シリーズ

Flying Saucers Have Landed

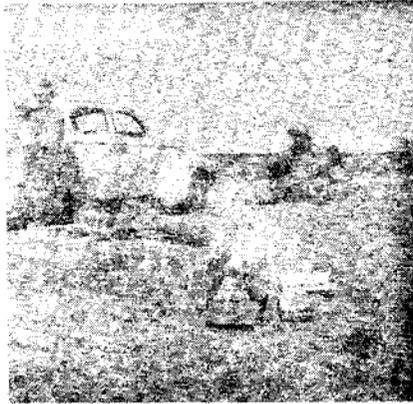
★新訳 空飛ぶ円盤実見記

ジョージ・アダムスキー

久保田八郎 訳

連載第2回

第 2 章



記念すべき十一月二十日

別な世界から来た一人の人間と私が始めて個人的なコンタクト(会見)をしたのは、一九五二年十一月二十日、木曜日の昼どきの十二時三十分頃であった。相手は自分の宇宙機すなわち一機の空飛ぶ円盤に乗って地球へ来たのである。相手はそれを「スカウト・シップ(偵察船)」と呼んだ。

これはデザート・セクター(小村落)からアリゾナ州バーカー寄り一〇・二マイルばかりのカリフォルニア州の砂漠で発生したのである。

一九五二年中、私は写真撮影の試みを兼ねて、空飛ぶ円盤が自撃されたとか、どうやら着陸するところだったらしいと聞かされた砂漠地帯へ多くの旅をした。どの旅も成功しなかったが、いつか成功が自分のものになるという望みをかけ続けていた。

アリゾナ州ウィンスローのA・C・ベリー夫妻が初めてパロマーガーデンズへ来て、私と個人的に話したいと言ったのは、一九五二年八月下旬だった。その時まで私は夫妻のことについては知らなかった。対談中に夫妻はアリゾナ州プレスコットのジョージ・H・ウィリアムスン博士夫妻について話してくれた。この四名は私と同じほどに空飛ぶ円盤に興味を持っていた。彼らはこの問題について入手し得るあらゆる資料を読んでいたためである。彼らもこの不思議な物体がときには低く、ときには高く空中にきらめくのを見ていた。しかも四名とも円盤が着陸するのを見たたくて各所の砂漠地帯へ旅をしていたのだ。それから彼らは私のことを聞いて、ベリー夫妻が車で私に会いに来て自分たちの体験談を話してくれたというわけである。

その後ベリー夫妻とウィリアムスン夫妻が一緒にやって来た。客としてパロマーガーデンズに数日間滞在した後、私がこの次にコンタクトを試みる場合は事前に電話をかけてくれと言う。彼らが滞在中に私たちは何度も会って親しくなっていたので、コンタクト行きの準備ができたなら私と同行したいというのである。

私は彼らの要求どおりに電話をかけることを約束したが、このような旅行が一兩日以上にわたるようになり事前に計画することは殆どないからと予告しておいた。こうして十一月十八日の夕方、ウィリアムスン博士に電話をかけてカリフォルニア州ブライズ付近の或る目的地へ向かって翌晩真夜中に出発するからと話し、二十日木曜日の早朝にそこで合流できるかと尋ねたのである。相手はできると言う。それにウィリアムスン博士が連絡し続けていたペーリー夫妻もできるとのこと。こうして手配ができて、期待は非常なものだった。彼らは常にこのような旅行に出たがっていたからである。

野生の動物たちの目を覚まさせることを恐れながら（注）これは冗談で言ったもの）私がパロマーガーデンズを出発して、カリフォルニア州ブライズの西側にあるハイウェーでペーリー夫妻とウィリアムスン夫妻に会うために山道を車でぐるぐる下って行ったのは二十日の朝一時近くであった。この旅で私と同行しているのはパロマーガーデンズの所有者で、そのレストランの経営者であるアリス・K・ウェルズ夫人と、私の秘書のルーシー・マクギニス夫人である。この二人の女性は遠距離の運転を交替で行なうことになっていた。私はハイウェーでは車を運転しないからだ。

われわれは後輪のタイヤの一つに釘がささったために一時間の遅れを生じた後、八時少し過ぎに目的地へ到着した。そのタイヤで走り続けたためにタイヤをだめにしたことがわかったので、結局私は新しいタイヤを買わねばならなかった。

アリゾナから来た四人はブライズから数マイル離れた所でわれわれを待っていたので、合流して全員でその町へ車を乗り入れてから、そこでゆっくりと朝食をとった。それをすませて一同は数分間歩道に立って、さてこれからどこへ行こうかと議論し合ったのである。アル・ペーリーの車には他の三名が乗っていたが、彼は文句なしに私の提案に従うと言う。それで他の連中も

そうしようと言った。

結局われわれはもと来たハイウェーを逆もどりすることにきめた。これについては特別な理由はない。ただ私は直感刀または内部の「感じ」に従う習慣を養達させているので、逆もどりすることが進路のように思われたのである。

たぶん理由とすれば次のようなことだろう。始めにブライズヘッドドライブした時に私はかつて陸軍の演習場とおぼしき場所と広大な飛行場とに気づいていた。この二つはもう使用されていない様子であった。ところがこれらの向う側に一本の道路が見えていて、それに沿って行けばはるか彼方にある山の尾根のふもとへ接近できると思っただのである。ただ私はブライズへ着くまでに、その道路を通過してからどれくらいかの距離を来たか見当がつかなかった。その道路を探しながら引き返してみると、距離はどうかやら私の見当よりも二倍もあるようだった。

一行がデザートセンターに着いた時、探していた道路がそこから右手にあった。アリゾナ州パークに通じるハイウェーである。

このパーク街道を約十一マイル行った所で、道路わきに車をとめて、外へ出て様子を見ようではないかと私は提案した。そしてその位置から何をしようかと考えることにした。

こここの地面は人が通常砂漠という言葉で予想するほどの砂地ではない。むしろ小さな種々の大きさの奇妙な面白い岩石が地面を覆っている。ウィリアムスン博士はこれを火成岩だと言った。それらは鋭くとがっていて、形はさまざまである。

銀白色のヒイラギの小さな茂みが小粒の真赤な実をつけたりしながら点在している。また、われわれの知らない別なヤブにも注意を引かれた。しかしこの地域では植物はきわめてまれである。

一行がこの地点に到着したのは午前十一時頃だった。それから三十分間はあたりをぶらついて面白そうな岩石を見つけたり、あちこちでそれを拾い上げては子細に調べたり議論をし合ったりした。強風が吹いていたが、ときたま静まった時に日光の熱にくらべると全く冷たい風だった。だから風上に背を向けているほうがよかったし、婦人たちは頭に布をかけて寒さを防いでいた。

車をとめた場所から少し離れた所に乾いた浅い川床を見つけたが、これは例の山の尾根のふもとから来ているようだった。この水路は約三十五度と思われ下向きの傾斜面の浅い谷となってハイウェーを横切っており、われわれがぶらついた道路のそばに面した隆起面のあいだをうねって続いていた。

好奇心にかられたアル・ベリーと私は、山の向う側に何かがあるか、地面はどのように展開しているかを調べるために、他の人たちから離れてこの尾根のふもとまで歩いて行った。二人が見た限りでは、ハイウェーがあることを除いては、もとわれわれがいた側の土地にくらべてあらゆる点で似ていた。そしてその土地は何マイルも展開していた。

こんなふうにして約三十分間をすごした時、だけれが、ここらで昼食にするのもいいじゃないかと言い出した。これは文句なしに全員が賛成した。日暮までに一同が何に遭遇するかわからないので、アリスが軽いランチを持って来ていた。——ゆで卵、サンドイッチ、クッキー、キャンディー、ビンにつめた飲物二、三本、飲料水をつめた一ガロン入り水筒二本等である。これらの包みが解かれて一同に手渡された。

数人は車をとめた道路のフチの境目になる盛上がり部分に腰をおろしたが、石ころがとがっているためにすわり心地はよくなかった。他の者たちは近くにすわって、卵のカラをむいたり食べたりしながら、これからどうするか、どこへ行くか、などについて話し合ったりした。空は美しく澄んで、こまか

くまばらな雲があちこちに浮かんで流れて消えている。われわれは背後の山々の殆どが数マイル彼方にあることはわかってはいたけれども、砂漠の漠然としたふん囲気の中にあるので、すぐ近くに存在するように見えた。

一同全員が見渡す限りの空をくまなくがめ渡しながら警戒していた。そしてどこかに宇宙機の出現を示す閃光が見えはしないかと一生懸命に期待していた。同時に、われわれはそばを通過する自動車かわれわれのやっている事を見ようとして例外なくスピードを落とすことにも気づいた。

するとベティー・ベリーが言った。「少し写真を撮りましょうよ」
ベリー夫妻は映画撮影機を持参していた。彼らはこの機嫌を借りたのであって、よく使い慣れていなかった。また余分のフィルムも準備していた。ウィリアムソン夫妻は普通のカメラを携行していた。

時刻は正午を少し過ぎた頃だった。ベティー・ベリーとウィリアムソンの二人がずっと写真を撮り続けていた時、一機の飛行機の爆音が道路のむこうの山々の峰の背後から近づいてくるのが聞こえた。

私はこの山々が、道路の向う側、だと言うけれども、それらの最も近い部分でさえもハイウェーの向う側のフチから町の二ブロックの長さくらいはあったと思う。ところが砂漠の静寂の中では空気を伝わる音響は遠くまでとどくので、一同はその飛行機が山の尾根を低く通過して視界に入る前にまさに一分間もその爆音を聞いたのである。それは旧式の双発機で、見たところ日課飛行をやっているようだった。

一同はこの飛行機が頭上低く通過してコースを進行して行き、遠く小さな点となって消えて行くのを見ていた。

突然、そして同時にみんなは一斉に振り向いて、数分前に飛行機が通過した最近距離の山の尾根の方を見た。空中高く浮上しながら、しかも音もなく巨大な一機の葉巻型の銀色の宇宙船がいたからである。翼やその他

の付属物はなかった。ゆっくりと、まるで漂流しているかのよう一同の方へやって来て停止し、無音のまま一個所に滞空したかのように思われた。

興奮したウィリアムスン博士が叫んだ。「あれは宇宙船か？」

最初見た時それは巨大な宇宙船の胴体のように見えた。塗料の塗られていない横腹から強烈な日光を反射し、翼などは見えないような高度と角度にあるようだった。

過度の興奮と速断を避けるように訓練されていて、特に宇宙機についてはそうあるように教え込まれてきたルーシーが答えた。「ちがうわ、ジョージ。宇宙船じゃないと思うわ」

「だってあの物体の高さを見てごらん！ しかもあんなに大きいじゃないか！」とアルが叫んだ。

「しかも、ルーシー！ あれは地球の飛行機のように翼やその他の付属物がついていないよ！」とジョージ・ウィリアムスンがなおも主張し続けて私の方を振り返りながら「アダムスキー、君はどう思う？」と言う。

私が答える前にルーシーがささぎった。「そのとおりよ、ジョージ！ ごらん！ 上部がオレンジ色だわ——あの全長！」

真相が急速にわかってくるにつれてあたりの空気が興奮に包まれた。そして全員が一斉にしゃべり始めた。アリスは、早く車から望遠鏡を取り出してあの美しい宇宙船のクローズアップ写真を撮れと私にせきたてる。アル・ペーリーは宇宙船が停止している間にその映画を撮影せよと妻のベティーに呼びかけたが、彼女は興奮しすぎていたためにカメラを正しくセットすることができない。彼女が落ち着くまでには宇宙船はすでに動き始めていた。

携行していた二個の双眼鏡が次々と急速に手渡されたので、全員がはつきりと見ることができた。その双眼鏡でジョージは（ウィリアムスンは）或る種の黒いマークが胴体にあることに気づいた。詳細は不明だけれども彼にと

っては全くの未知のマークであった。第二次大戦中に米空軍のメンバーであったジョージ・ウィリアムスン博士は、米軍ばかりでなく他の国々の飛行機のマークに精通しているのである。

これは絶対に忘れられない光景であった。この光景はそばを通過する如くなる自動車の運転者でも容易に目撃できたはずである。だが上空を見た人は殆どいなかった。特にこのことはハイウエーを飛ばして行くドライバーたちにとって、はっきり言えることである。彼らは前方の道路だけに視線を集中させていたのだ。

人々がしばしばやるように、もし一行中のだれかが上空を指していたならば、おそらくそばを通過する車のどれかがとまって、その中に乗っている人たちもわれわれが見たのと同じほど容易に、この宇宙からの巨大な訪問者を見ることができただろう。しかしわれわれはこのような注目を浴びないように極力警戒していた。

そして極端に興奮していたにもかかわらず、ここは適当な場所ではないと私は思った。宇宙船がわたってもコンタクトする計画だとすればおそらく都合の悪い場所だったのだろう。だが私はこの宇宙船は確かにコンタクトの計画に関係があると強く感じたのである。

普通ならだれもビクニククに來ないようなこの砂漠地帯で、一同が心に起こした好奇心を充分意識しながらも、私はこのように広々とした場所有望遠鏡とカメラをすえつけることによって人目につきたくなかった。そして何よりも宇宙船の着陸と個人的なコンタクトが行なわれるのを妨げるようなほんの小さな過失をおかしたくなかった——もしコンタクトの可能性があれば、しかも今私はその可能性があると確信したので。

私は言った。「だれか私を道路ぞいに車でつれて行ってくれ——早く！ あの宇宙船は私を探しながら來たんだ。宇宙船を待たせたくないんだ！」

たぶん円盤はもう空中のどこかに来ているだろう——多勢の人間が見ているような場所へ降りて来るのをためらっているんだ」

なぜこんな事を私が言ったか、どうしてそれがわかっていたかについては尋ねないでほしい。すでに述べたように私は自分のフィーリング（感じ）に従うクセがついていて、そんなふうに感じたのである。だがなぜそう感じたかは自分にもわからない。敏感な心の働きについて理解力を持つ人にとつては説明は不要である。理解力を持たない人には説明をしても長くむづかしくなるだろう。

ルーシーが素早くわれわれの車に乗り込んでエンジンをかけた。アルも一緒に乗せてくれと頼んで彼女のそばにすわった。私は他の者たちにむかって「元の位置にいて発生する出来事の手をしっかりと見ていてくれ」と言い残したまま車の後部席に乗った。

ルーシーが車を後方へ向けてハイウェーを走り始めた時、アルが上空を見上げたので私も後部の窓から見た。すると二人とも巨大な宇宙船がターンして車と一緒に移動するのを見たが、それは空中高く、しかもハイウェーと山の尾根の中間あたりにいるように見えた。われわれは約半マイル（八百メートル）ばかり走りながらそれを親しく観察した。

ここで私はルーシーにむかって、右折して近道を行き、望遠鏡をすえつけるのに格好な場所だと思われる地点へつれて行ってくれと頼んだ。

そこには何かの車類の通った跡がはっきりと残っていたし、大宇宙船のすぐ真下の地上に一本の道路が存在するかのようには思われた。アルと私は、この地域に到着後まもなく尾根の他の端まで歩いて行った時に、尾根のふもとので所で尾根全長にわたっているこの道らしきものに気づいていた。（注）記者の職場の同僚ダイアナ・タック夫人の説明によれば、この道らしきものは宇宙船が実際に地面へ降りたことのある場所の跡のように思われたことを意味しているという。あ

たかも飛行機の着陸コースのよきなものである。二人がそのことで話し合った時に、どうやらここは廃棄された古い射撃場であって、この道路はかつてジープが通ったものらしいと結論をくだしたのである。

この岩石は小さいけれどもすぐとがっていて、タイヤには悪かった。しかも破損したビンやガラスが散乱しているので、その上を走るのをどうかと思つたが、私が選んだ地点へ装備品一切を手で運ぶかわりに車で行けるならば、多くの時間と労力が節約できるだろう。平たい頂上の、低い、丘のよきな岩層のふもととの所のハイウェーからたっぶり半マイルの地点である。

私の装備品は六インチ望遠鏡、三脚、ハードケースから成り、ケースにはカメラ、望遠鏡用アタッチメント類、全部で七枚の超高度フィルムを入れたフィルムホルダー、プロローニー判（注）六センチ×九センチ）の柯达ック・カメラ一台が入れている。

われわれは更に前進することにきめて、無事乗り切ることに成功し、私が選んだ地点から約二百フィート以内に停車した。ここで大宇宙船は殆ど車のすぐ真上にいるように見えて、車がとまるにつれて宇宙船もとまったのである！

アルは私が装備品を取り出して三脚をすえつけ、できるだけしっかりと望遠鏡をそれに固定するのを手伝ってくれた。（注）20ページの二段の写真を参照。これはアルが撮影したものだ。）

強風がひどく吹きまくっていたのでこの作業は困難だった。そして一同が作業を終えたにもかかわらず風は望遠鏡をゆさぶった。不安定なマウンティングでは決してよい写真は撮れない。

だが私はこんな準備で多くの時間を浪費したくなかった。どれだけの時間が私に与えられているか見当がつかなかったからである。私は確かに急ぐ必要を感じた。しかしこれを書いてる現時点にその経験を回想すると、その

時のフィードバックが大宇宙船内の人々から発せられたものか、それとも私自身の興奮によって起こったものかはよくわからない。

私はアルとルーシーにできるだけ早く他の連中の所へ引き返して、発生するかもしれない出来事を全員で親しく注視するように伝えろと言った。

前にも述べたように、私はこの数年間カメラを向けてきた宇宙船の乗員と実際に会う夢を何度も描いてきた。私自身が単に乗り気であるというばかりでなく、断じて円盤に乗って飛んでみたいという切望にかられていたと何度も述べた。この切望には、蒸発した人々に関する多くの噂を私が聞いたという事実と、しかもその人々が宇宙船でつれ去られたのかもしれないという考え方を伴っている。このような噂の殆どは、種々の事実が私に与えられているために、十分に根拠あるもののように思われた。しかもその「さらわれた」人々のだれも私の知る限りでは帰って来なかったのである。

もし今着陸が行なわれて、私が地上に降り立った乗組員と個人的なコンタクトが許されたとすればどうなるだろうかという現実には直面すると、私も彼らと一緒にどこかへ——彼らの発進地にさえも——つれて行ってもらえるかもしれないという可能性があった。その結果、私と同行して来ている人々が私の円盤同乗を目撃してくれることを期待したのである。

だから私は一同に対して、私と離れた距離で彼らにとつて見える物は何でも細心の注意を払って見るようにと警告したのである。この距離は半マイル（八百メートル）と一マイル（千六百メートル）のあいだの距離だった。

私を迎えに来るまでにどれだけ待っていたらよいかと尋ねられて、みんなが近くにいるとも発生するかもしれない出来事の妨げにならないようにしようと思った私は、一時間たったら私を迎えに来てくれ、ただしそれまでに合図をしたら別だ、とルーシーに命じた。円盤が離れた時、もし私の望みどおりにだれかを呼び寄せる態勢になったならば、ハイウェーまで歩いて行って帽

子を振ることにしようと言明した。しかしいざいざにしても一時間が経過したら引き返すつもりだった。その時までにはすべてが終わっているだろうと考えたからである。

車が私の指示に従って引き返すと、大宇宙船もその鼻先を反対の方向に向けた。無音のまましかも急速にそれは山々の頂上を越えて視界から消えたが、その直前に多数の飛行機がこの巨大なちん入者を取り巻こうとしてか、頭上へ轟然と飛来したのである。

アルとルーシーはハイウェー上において山々から一そう離れていたために、私よりも長く宇宙船を見続けることができた。しかし二人が他の者と合流するまでには宇宙船は鼻先を上方に向けて、あっという間に大空へ上昇して消えてしまった。あとには飛行機群が何も無い空間を取り巻いているだけだった。

ただ一人で望遠鏡と雑念とともに取り残された私は忙しくカメラを望遠鏡に取りつけたり、アイピースの調整をしたりしていた。この調整装置は移動とすえつけの最中に少し狂っていた。その間ずっとさまざまな考えが心中を通り過ぎていった。何かが起こるかもしれないという期待、何も起こらないだろうという恐れ、あの宇宙船は引き返して来るだろうか、飛行機群が追っ払ったために永久に来ないのではないだろうか、不思議な飛行体が近くへ来たとすれば、望みどおりの写真が撮れるだろうか——一般大衆を文句なしに納得させるような写真が——。その他この線にそった無数の想念が去来するのだった。

しかも円盤から出て来る人間との個人的なコンタクトを長く望んできたのに、この時はそのようなコンタクトが実際に発生するという期待を持つどころではなかった。私はとにかく立派な写真を撮影したかったのである。これまでにうまく撮影したものよりももっと細部を写し出した宇宙機のかかりの

クローズアップ写真が欲しかったのだ。しかし以前の経験からして、たといこれ以上何も起こらなくてもさほど失望はしないだろう。

車が走り去ってものの五分も過ぎた時、私は空中の一つの閃光に注意が引かれた。すると殆ど同時に一機の美しい小型飛行体が、山の二つの峰のあいだのサドル（馬のクラ状の峰）の中で浮かんでいるように見えて、私から半マイル離れた谷間に無音のまま落ち着こうとしているように思われた。山頂から下へは全然下降しないのだ。機体の下部だけが山頂の下にかくれていて上部のドーム部分は山頂の上方に現われており、後方で注視していた他の者たちは充分に見ることができた。しかも私の前方に浮かんでいる機体全体を私が望みできたのは、それがこのような位置にいる時だった。と同時に、何マイルも続くハイウェイや周囲の地形は円盤の乗組員にも完全に見通しがいなかったのである。

素早く私はそれを望遠鏡のファインダー内にとらえて、できるだけ早く七枚のフィルムに撮影した。カメラ後部のビントグラスをのぞいてビントを合わせる手間ははぶいた。とにかく私は幸運の女神が自分についていて、写真がうまく撮れることをずっと祈っていたのである。

カメラ——古いハギー・ドレステン・グラフィックス型——から露出済のネガの入ったフィルムホルダーを一個ずつはずすにつれて、私はそれを着ていたジャケットの右ポケットに入れた。このポケットならどんな事故が起こってもフィルムは安全だろうと思ったからである。

私はカメラを取りはずして携帯用のボックスに収めた。次にブローニー判カメラで何が撮れるかやってみようと思いついた。最初の写真（乾板番号12）を写した時、円盤が強くきらめくとともに動いて、最初に来たサドル部の上空に消えてゆくのを見た。更に二機の飛行機が轟々とやって来たからだ。

飛行機が二度ほど円を描いて再び飛び続けるのを私は立って見つめていた。

円盤がまたも飛行機をのがれて母船へ帰っていることを私は確信した。

それで、再びブローニー判カメラで更に数枚の写真を撮ることにした。これは宇宙船写真がうまく写っていた場合を考えて、この地域の一般的な地形を示すためである。写真類がうまく写っているかどうかはまだ疑問であったが、これは毎度のことだ、仕上げ作業が終わるまではわかりっこないことだ。専門の写真家が通常写真を撮った時に持つような、良い写真を撮ったという絶対的な確信の状態に私はまだ達したことはない。

ブローニー判で三枚の写真を撮ったあと、私はそこに立ってコダックカメラをまだ手にしたまま数分間あたりを見廻した。円盤にかなり接近したことによって少々畏れていたし、その中に乗っている人がだれであろうと、相手は私が円盤を撮影していたことを知っているのだろうかと思ったりした。相手は知っていたという感じが私にあった。私はあの美しい飛行体を操縦している人に会えることと、その人に話しかける機会を得たいとひたすら願っていた……たぶん機内を見せてくれるかもしれない。

突然私の夢想は破られた。四分の一マイル（四百メートル）前方の二つの低い丘の間にある谷の入口の所に立っている一人の人間に注意を引かれたからだ。相手は近寄って来いと身振りで合図をした。一体だれなのか、どこから来たのかと私は不審に思った。確かに以前はそこにいなかった人だ。相手は道路の方から私のそばを通り抜けはしなかった。一同がたむろしている地点から来たはずもない。私に気づかれないで一体どのようにして山のどこかの部分を越えたり下ったりしたのか、不思議である。

たぶん山野の踏査人なのか？ それともこの山間部に住んでいる人なのか？ 私がこの地域を選んだ時、ここから数マイル以内は人の気配はないと思っていた。しかし相手は手助けを必要としないとすれば、なぜ私に手招きしたのだろうか？ そこで私は心中に少々疑問をいだきながらも新しい体験を持

つことのうれしさを感じながら、相手の方へ歩き始めたのである。

接近してゆくにつれて奇妙な感じがわき起こってきて、私は警戒的になった。と同時に周囲を見廻して、私と相手の二人が仲間たちによく見えていることを確かめた。表面的には別段この感情が起こった理由はない。相手は一般人と変わらなかつたからである。相手は私よりも少し背が低くて、かなり若いことがわかつた。近づくにつれて気づいたのだが、ただ二つの著しい相違点があつた。

1. 相手のズボンは私のものとは違っている。それはしゃれたスタイルのもので、スキーズボンによく似ている。それで、こんな砂漠地帯でなぜ相手がそんな物を着用しているのかという疑問が心中をかすめた。
2. 相手の頭髪は長くて肩まで垂れており、私の髪と同様に風に揺れている。だがこれはさほど珍しいことではない。そんなふう長い髪をしただ多勢の人を私は見ているからだ。

ずっと続いた奇妙な感じを理解できなかったが、それは（その感じは）私が近寄るのを待ちながら立っている、微笑を浮かべたその青年に対する友好的な感じであつた。それで私は何らの恐怖もなしに相手の方へ歩き続けたのである。

突然、あたかも私の心からボールが取り除かれたかのように警戒の感情が完全に消え去つたために、私はもう仲間の友人たちのことや、指図どおりに彼らが私を見守っているかどうかも忘れてしまった。この時までには相手はすぐそばまで近づいていた。相手が私の方へ四歩あゆみ寄つたため、互いの距離は腕の長さ以内になつた。

そのとたんに私は初めて自分が宇宙から来た人間の面前に居るといふこと

にはっきり気づいたのである——相手は別な世界から来た人間なのだ！ 私には相手の方へ歩いてきた時に宇宙機を見なかつたし、それを探し求めてあたりを見廻すこともしなかつた。相手の宇宙機のことを考えもしなかつた。この突然の事態によって茫然となつたので声も出なかつた。私の心は一時的に機能を停止したように思われた。

相手の容姿の美しさは私にこれまでに見た何ものにもまさつていて、その顔に浮かんだ愉快そうな表情は、私の個人的な自我に関するあらゆる想いを忘れさせてしまった。

このような偉大な知恵と大いなる愛を持つ人の面前にいて私は幼児のようを感じて、心中では全く謙虚になつてしまつた。……なぜなら相手からは限らない謙讓さとともに無限の理解力と親切さのフィードバックが放たれてい

たからである。相手はその出現によって私が受けた異常な影響と私が事実上茫然となつたことに気づいた。そこで私を正気に返らせようとして手を差し伸べた。

私は自分たちの習慣的なやり方でこれに応えた。

しかし相手は微笑し、頭をかすかに振つてこれをこぼんだ。われわれが地球上で行なう握手のかわりに、彼は片手の掌を私の片手の掌にびたりとくっつけた。ただ触れただけで、強く押しつけたのではない。私はこれを友情のシルシだと解釈した。

私の掌で感じた相手の肉つきは赤ん坊のようにキメのこまかいものであるが、引きしまつて温かい。両手はしなやかで、優雅な女性の美しい両手のような長い先細の指がついてゐる。実際、もし相手が別な衣服を着れば、すばらしくきれいな女性と見られるだろう。

相手は身長約五フィート六インチ（約一六五センチ）で、体重は——われわれの標準に従えば——一三五ポンド（約六一キロ）である。年齢は二十八

才程度と推定したが、もつと年をとっていたのかも知れない。

丸顔で極端に広い額があり、大きくておだやかな灰緑色の眼を見せているが、両横に少し傾いている。ほお骨が西洋人より少し高いけれども、インディアンや東洋人ほど高くはない。鼻はすてきな形だが、特に大きくはない。普通の大きさの口の中に美しい白い歯があつて、微笑したり話したりする時に輝いた。

相手の皮膚をできるだけ正確に説明すると、その色は一様にムラのない、ほどよく日焼けしたような色である。(注||後に伝えられたところによれば、相手は東洋人のような皮膚の色をしていたということであるが、この時はなぜかアダムスキ―はえん曲(このような表現をした)そして顔を剃る必要は全然ないように思われた。子供の顔と同様に毛がないからだ。

頭髮は砂色で、美しい波を打って肩まで垂れており、私がこれまでに見た如何なる女性の髪よりも美しく光っていた。それで地球の女性たちがこの男の髪のような美しい髪を持ったならば、どんなにうれしがるだろうかとふと思つてみた。

前にも述べたように、相手は頭髮に覆いをつけておらず、それは風に揺らいでいた。

相手の衣服は上下続きの服で、各種の仕事に従事している地球人がその仕事を明示するために制服を着るのと同様に、これは宇宙人たちの着る制服なのだという感じがした。

その色はチョコレイト・ブラウンで、かなりゆったりしたブラウスの部分と、タートル・ネックによく似た首をしめつけた高い襟からできていた。ただし襟は折れていない。袖は長く、少しだぶついでいて、ラグラン袖に似ており、手首の所に絞りバンドがついている。

上下幅が約八インチのバンドが一本、腰まわりに巻いてあつた。そして衣

服全体の外観と異なる唯一の部分は、この腰バンドの上端と下端についている幅約一インチ半の細長い部分である。これが何よりも明るく輝いていて、黄金色を放つていた。

ズボンもかなりだぶだぶで、足首の所は袖口の場合と同様にバンドでしめてある。スタイルはスキー用ズボンによく似ていた。

この衣服の外観を説明するのは実際至難である。われわれの言語で完全に描写できる言葉を私は知らないからだ。

それは確かに織り物で、たいそうキメのこまかい生地だが、織り方はわれわれの生地のとれとも異なるものであつた。衣服全体にツヤがあつたけれども、そのツヤは仕上げの加工によるものなのか、それとも糸の原料の性質によるものかはわからない。われわれのジュス、絹、レーヨンのようでもない。というのはその服が単なるツヤ以上の光輝を放つていたからである。

私には如何なる種類のチャック、ボタン、バックル、ファスナー、ポケット等は見えなかつたし、われわれの服にあるような縫目にも気づかなかつた。相手の服がどのようにして作られたのか、今だに私には謎である。

相手のクツは真赤な色であつた。クツも見たところ織り物で作られているようだが、服地とは違う物のようだった。それは革によく似ていたからである。柔らかくてしなやかなクツだ。というのは、二人が話しながら立っていた時、クツの中で相手の足が動くのを見たからである。

それは男ものオックスフォードのようによく、足のまわりをびたりと包んでいて、サイズは九ないし九半ぐらいだろう。だがクツの足入れ口は足首の外側の「土踏まず」とカカトの最後部の中間の半分目ぐらいの所にあり、幅のせまい二つのストラップがここにあつたが、バックルやファスナーは見えなかつた。それでこのストラップは或る種の婦人クツの中にある織り物の挿入物に似て、伸びる性質を持つにちがいないと思つた。

カカトは地球の男子用クツよりも少し低くて、瓜先は丸かった。私は特にそのクツに注目した。なぜなら二人の対談中に相手はそのクツの裏の紋様が最重要であることをはっきりさせたからである。だがその詳細はあとで述べよう。(注)このクツの説明の部分の翻訳には難渋した。オックスフォードというのは短クツであつて長クツではない。クック夫人は宇宙人のクツの事は意味がよくわからないと言つたので、同じく歌者の同僚たるデ・キンソン氏に相談したところ、彼はクツのカタログ類を持ち出して参考にしたが長考の結果、前記の訳文のような結論に達したのである。氏によれば、原著者はオックスフォードの意味を感じていたのではないかという。氏が図示してくれた宇宙人のクツは大体に次の図のようなものである)



時間が経過してゆくことと、しかもただ相手を見てい
るだけでは何も知識が得られないこととにふと気づいた私
は、どこから来たのかと尋ねてみた。

相手は私の言葉を理解したようには見えなかつたので、再度尋ねてみた。
しかし相手の唯一の応答は頭をかすかに振ることと、申し訳ないと言いた
そうな表情を顔に浮かべたことであつた。それは私の言葉も、その言葉の背
後にある意味も相手が理解していないことを示していた。

人間が互いに意志を伝え合おうとするならば、たとい相手の言葉を話した
り理解したりすることはできなくても、伝達することが可能であると私は強
く信じている者である。このことはフィーリング(感じ)、手まね、そして
特にテレパシー(精神感应)等によってなされるのである。私はこれを事
実として三十年間教えてきた。そこで何らかの情報が二人の間に伝えられる
べきだとすれば、この方法(テレパシー)を応用する必要があると結論をく
だした。しかも私の知りたい事柄が沢山あるのだ。私が考えつくことができ
さえすれば――。

そこで相手に対して最初の質問の意味を伝えるために、私の能力の最善を
つくして心中に一個の惑星の光景を描き始めた。と同時に空中高く輝いてい
る太陽を指した。

相手はこのことを理解した。そして相手の表情はそのことを示していた。
それで私は指でもって太陽の周囲を丸く描いて、太陽に最も近い惑星の軌道
を示し、「マーキュリー(水星)」と言つた。次に二番目の軌道として再び
太陽の周囲に円を描いて「ビーナス(金星)」と言つた。三番目の円の時に
は「アース(地球)」と呼びかけて、われわれ二人が立っている地球を指し
た。

私はこの手順を二度くり返し、その間ずっと心中に一個の惑星の光景をで
きるだけ鮮明に描き続けて、この時、地球に属する者として自分をゆびさし
た。次に私の眼と心中に一つの疑問を浮かべながら相手をゆびさした。

今や彼は完全に理解した。そしておおらかに微笑しながら太陽をゆびさし
て一つの軌道を描き、次に二番目の軌道を描いて左手で自分自身に触れなが
ら、右手の人差し指でその二番目の軌道を数度示してみせた。

私はこの二番目の惑星が相手の故郷であることを意味するものと解して尋
ねてみた。「あなたは金星から来たというのですか?」

これは一番目の惑星に関して私が「金星」という言葉を発した三度目であ
つた。すると相手はそうだというようにうなずいた。そして相手も「ビーナ
ス(金星)」という言葉が発した。

相手の声はおとなの男子よりも少しかん高い声であつた。その声の調子は
男の声が子供から成人に変化をとげる前の少年の声に近かつた。そして相手
は一語しか発しなかつたけれども、その声は音楽的で、私はもっと聴きたい
と思つた。

次に私は尋ねた。「なぜあなたは地球へ来るのですか?」(以下次号)

日本GAP 各地で 活動中

東京本部の活動

日本GAP東京本部は毎年秋季の年次総会開催以外に各種の活動を続けているが、主要行事として月例研究会を毎月開催して会員の知徳向上を図っている。これにはアダムスキーの著書類をテキストとして研究を行なう一方、意見交換、資料公開、研究発表等も実施して、きわめて有意義な一日をすごすのである。これはすでに都内では五、六年続けられてきたのであって、関係者の努力は特筆に値

する。現在の参加者は平均二十名前後で、扱うテーマはおよそ人間の考え得る限りの最高度の問題ばかりである。まさに宇宙の御子たちの集いといつてよいだろう。

最近二月七日の日曜日に行なわれた。場所は池袋の豊島区民センター。冷暖房完備の快適な近代的ビルの四階第六会議室でこの日十九名が参集。久保田代表の挨拶と経過報告のあと、アダムスキーの“宇宙哲学”をテキストにして今回より代表自身が講師となって英文原書と訳書を対照しながら一時間にわたって講義し、そのあと会員の研究討論、質疑応答等により“宇宙哲学”の研究を終了。引き続き蕪沢司会者の発案によるテレビシーの実験となり、六名が被験者となって実修して興味深いひとときをすごした。終始きわめて真剣ななかにも和やかな雰囲気のみなぎって、すばらしい会合となったのであった。

都内在住の会員の方はふるって参加されるようおすすめしたい。独りで研究するのもよいが、多勢で話し合えば意外に収穫があるものだ。月例会の規定は本誌第4号32ページに出ている。

写真右は当日の参加者。前列左より渡辺利朗、蕪沢潤一郎、久保田代表、安斎紳夫、牧野繁雄。中列左より竹島 正、中川芳政、佐々木宏雄、小杉幹夫、増田幸雄、佐々木美知子、鈴木咲枝、相川敬子。後列左より江口理彦、小宮豊隆、半田吉徳、藤木裕二、中山正史、山本佳人の各氏。



負けない大阪支部

日本GAP大阪支部も結成以来三年目に入ったが、その間ずっと月例研究会が続けられており、出席者が少数にもかかわらず現在は一ヶ月に二回ずつ開催されている。これは驚くべき熱心さと徹底的な探究心のあらわれであり、リーダーたる市川大阪支部代表とその他数名の有力メンバーの高貴なる奉仕精神と求道心は凜然と輝きながら宇宙空間に永遠に刻みつけられるであろう。

本年第一回の会合は一月十七日に尼崎産業郷土会館で行なわれ、“宇宙哲学”の輪読研究、討論等を真剣に実施して多大の効果をあげた。参加人員数は問題ではなく、大切なのは“やる気のある人”が来ることである。ヤジ馬ばかりが数千人集まっても意味はない。

これについて市川代表は次のように報告された。

「本年第一回の会合、少ないのではないかと案じましたが、かえって三重から上島さんが連休を利用してかけつけて下さったり、斎藤さんも久しぶりに忙しいなかを出席されて、若い方々の活発な討論は“我々の会”

であるという自覚がみえて大変うれしく思いました。久世先生が来られなかったのは残念ですが、研究討論が始まるとみな熱心に語り合いました。大阪支部が結成されてより三年目に入りますが、会員諸君の顔に変化があらわれたように思います。美しくなっているようです。全く想念の影響です」

写真は右より上島正義、河野八郎、前原信行、斎藤俊一、大坪邦久の各氏。撮影の失敗により右端にいた市川代表は画面外となった。



大阪支部月例会の規定については詳細が本誌第43号32ページに出ているので、関西方面の方は気軽に出席されたい。毎月第一、第三日曜日の二回。午後一時より五時まで。会場は尼崎産業郷土会館。大阪梅田より阪神電車で七つ目の

「大物」駅にて下車。すぐ北側に見える。当日会費百円。テキスト「宇宙哲学」。会館電話(四八八)二三五一。

群馬支部も活躍

「私たちの研究グループ」

群馬県に日本GAPの研究グループが誕生したのは二年前のことである。これは群馬県立大泉高校教諭三田堯一氏が約二五〇名の生徒にGAPスライドを公開したのがきっかけとなった。現在は同先生をリーダーとして十四名の同校生徒諸君が定期的に会合を開き、「宇宙哲学」や「生命の科学」等を研究するという全国でも珍しい高校生研究グループとなったのである。人格高潔な三田先生のおき指導のもとに研鑽する生徒諸君はまさにすばらしき神の子たちである。メンバー代表、吉永一夫君は次のように報じている。

一刻と激動する地球社会において、次第に全国各地で真の幸福と平和について真剣に考えざるを得なくなりつつある現在ですが、私たち現代人にとって、UFO問題は最も大きな問題であり、今やその解答を求められている時代であると思えます。そこで、こういう重大問題に対して正しい

道に地球社会を修正し、限らない喜びの中に温かい援助の手をさし出している他の惑星の進化したすばらしい人々が実在する事実を、私たちはGAPスライドによって始めて知りました。私達は学ばねばならぬ何か大切な事を取り残しているような気がしました。それ以来この問題について深く知る機会を与えて下さった私たちの高校の数学の三田先生と私たち生徒十数名は、先生の世話のもとにUFOの問題や人間の潜在能力の探求などについて初步的な研究を開始したのでした。

はじめは会合の内容を面白く、豊富なものにするために、また円盤の存在に少々疑問ある人もいり、あつちも配慮し、UFO問題を中心として、その他に超心理テレパシ、古代大陸などいろいろな問題を取り上げて会合を持つようになりました。この研究懇談会は、今から二年前に始まり、二月に一回程度自由参加の会合でしたが、みんな真剣に「知ろう」という欲求とともに、積極的に参加して、アダムスキーの著書の読後感を自由に語り合ったり、「生命の科学」の講演会を開いたり、ニュースレターから資料を取って想念観察法の学習、簡単なテレパシー実験、自由懇談などを土曜日の放課後や日曜日、休日などに行なってきました。また昨年はGAP総会に卒業生を含めて十一人が参加し、日本GAPの活躍ぶりと成果を見ることができ、更に各人がそれぞれ、これからの課題と明日への希望を胸に抱いて帰ってきました。昨年までを振り返って反省してみると、ただ「知る」ということだけで精一杯で、実行不足ではなかったかと思っています。

これから私たちは学んだことを日常生活の中に取り入れ、どんどん実行に移して行き、明るい建設的な想念の持主になりたいと願っています。現在メンバーの或る人は円盤探知器の製作に取りかかろうとしていますし、また或る人は「生命の科学」を催眠学習法を応用して身につけようとして計画しています。

今や新しい、自由ですばらしい社会が少しづつ形成しつつあると思います。我等青年は、この社会づくりに自ら参加しようではありませんか。勇氣と信念をもって。

最後に、私たち生徒に忙しい生活の中で、積極的な指導やお世話を下さっている三田先生ならびに、日本GAPの活動を起こし、今日までその発展に御尽力下さっている久保田先生に厚い感謝の意を表したいと思います。(筆者は群馬県立大泉高校園芸科三年生) 写真は群馬支部。前列左より三人目が三田先生。



アダムスキーを原書で読もう!

下記のような原書を米国のシャーロット・ブロップ女史のグループが取り扱っている。入手希望者は同女史宛に注文すればよい。海外注文の未経験の方のために注文法を詳細に掲げるから参照されたい。女史の住所は下記英文見本の左上冒頭の部分である。

書名	定価	送料
1) Flying Saucers Have Landed	\$3.95	+ 0.25
2) Inside the Flying Saucers	\$0.75	+ 0.15
3) Behind the Flying Saucer Mystery.....	\$0.60	+ 0.15
4) Cosmic Philosophy.....	\$5.00	+ 0.25
5) Telepathy, The Universal Language...	\$6.00	+ 0.45
6) The Science of Life (1冊につき5ドル、12課で60ドル)	\$5.00	+ 0.25
7) Print of "ORTON" Picture	\$1.25	+ 0.15

注=上記の各原書は下記の同一番号の日本語版に相当する。(7)は図書ではなく金星人の肖像画の写真。

- 1) 空飛ぶ円盤実見記 2) 空飛ぶ円盤同乗記 3) 空飛ぶ円盤の真相 4) 宇宙哲学
5) テレパシー 6) 生命の科学 7) オーソンの写真

◎入手希望原書の定価・送料を1ドル約360円の割で換算して合計金額に100円程度の手数料を添えて、地元の主要郵便局へ行き、外国為替送金をしたいのだが——と言えば用紙をくれるからそれに送金人と受取人の住所氏名を日本語と横文字の両方で記入し、裏面に注文図書名と金額を横文字で、署名を日本語で記入し捺印した上で提出する。すると係員が正確に計算して合計金額を請求するから払い込めば受領証をくれる。

◎以上で送金手続きは完了するが、これだけでは先方に金ごとくだけで、何を注文したのかわからない。そこで送金と同時に別に航空郵便で注文書を発送しなければならない。内容は英語で書く。日本語は絶対に不可。英文の注文書見本を下に掲げるからこの通りに書けば間違いない。ただしこれはブロップ女史宛注文の場合のみ適用される英文である。他所へ注文する文章としては不向きであるから混同しないこと。

P.O. Box 55 (発信人住所)
Valley Center, California (日付)
U.S.A. 92082

Dear Mrs. Charlotte Blob:

I have seen in the IGAP-JAPAN newsletter "KOSMOS", published by Mr. H.Kubota, that it is possible to order books by George Adamski through you.

Today I have sent you \$(合計金額) for the following titles, including cost of postage through (郵便局名) Post Office.

Yours sincerely,

(書名) (金額) (発信人署名)
" " (わかりやすくきれいに書くこと)

宇宙哲学

G. アダムスキー

待望久しき改訂版ついに刊行 絶賛発売中!
各月例会でテキストに使用、会員必携の書、

¥350 たま出版
〒45 東京都新宿区納戸町33
西心ビル
振替東京 94804

超相対性理論

清家新一

かつて話題を呼んだ著書の増補版が再度刊行された。反重力宇宙機研究の第一人者たる著書が、ぼう大な研究成果をまとめたもの。内容は超高度な物理学の公式に満ちており、シロウトには理解しがたいが、絶賛する学者もある。

¥1000 宇和島市大宮町1丁目4の12
〒100 イギリス宇宙研究協会日本支部

